

介護付きホーム研究サミット2024 第12回事例研究発表全国大会

優秀賞受賞者 研究発表概要

NO.1

法人名	社会福祉法人こうほうえん		
施設名	新しいなば幸朋苑 地域密着型特定施設入居者生活介護		
発表者名	谷岡 雅仁	役職	
研究タイトル	生活総合機能改善機器 DAM を活用した取り組み／身体機能向上及び職員の業務改善に繋がった事例		
ホーム所在地	〒680-0001 鳥取県鳥取市浜坂222-1		
開設	2023年 4月 1日	定員	29名
平均介護度	2.3	職員比率	1 : 2
研究の目的	<p>身体・認知機能の低下により1人では身体を動かすことが出来ない入居者が徐々に増加し、介護業務の増加とレクリエーション時の配置職員の増加が必要になってきた。集団レクリエーションでは全員が同じように取り組むことが困難となり、職員の補助も満足に行えない状況になっている。</p> <p>生活動作に特化した体操や同じ介護度の入居者を小集団で取り組める環境をつくることで一人一人にとって有効な運動、職員が補助できる体制づくりの見直しが必要と考えた。</p> <p>そこで、生活総合機能改善機器 DAM（以下 DAM）のプログラムを活用した結果、課題である個々に有効な運動レクリエーションの実施、職員の体制、関わりの時間の確保の問題解決に取り組んだ。</p>		
研究の背景	<p>レクリエーションを実施する際はメインで行う職員1名と補助につく職員1名を配置していたが、特に運動レクリエーションでは入居者の身体レベルが様々で一緒に出来ない、又は平均介護度に合わせた内容のレクリエーションだと自立度の高い入居者が参加しにくくなるような傾向になってきており、職員も有効なレクリエーションの方法がないか悩んでいた。</p> <p>個別レクリエーションの提案もあったが、日常生活の中で筋力低下による転倒の増加や全体的に入居者の介護度が上がったことで職員の介助場面での業務が圧迫していることでレクリエーションを満足に行えない現状になりつつある。</p> <p>入居者からは予防体操をしたいという要望が多くあり、介護現場における生活支援の中でも身体・認知機能の低下を防ぐという双方の共通の課題を解決したいと考えた。昨年、入居者からカラオケがしたいとの要望で導入した DAM だったが、生活リハビリの機能プログラムも備えており、そこに着目しレクリエーションのツールとして問題解決に取り組むきっかけとなった。</p>		
研究方法 ①対象 ②期間 ③内容 ④方法	<p>① 【対象者】 介護付きホームの定員29名・要介護1～5を対象</p> <p>② 【期間】 令和5年12月1日～令和6年5月31日 実施</p> <p>③ 【内容】 1. DAMのプログラムを活用し同じ介護度の入居者同士でレクリエーションに参加 2. 普段の運動レクリエーションと DAM のプログラムを行った際の入居者の様子と職員配置の変化</p> <p>④ 【方法】 1. DAM の機能を活用 ・生活リハビリ体操 〈日常生活動作の維持向上を目的としたコンテンツ〉 ・機能訓練 〈ご利用者の状態や目的に応じ、無理なく楽しく継続できるコンテンツ〉 ・音楽体操 〈カラオケの歌詞を活用し脳の活性化と記憶力低下を防ぐ〉 ・目で見ると感じる 〈昔懐かしい有名な映像や背景、変化する画像が流れ脳の活性化と記憶力の低下などを維持、回</p>		



復)

- 2. 職員の体制の見直し、介護度でグループ分け（2グループに分ける）
DAM 導入前：従来の集団レクリエーション要介護 1～5
最低でもメイン職員 1 名、補助 3～4 名が必要だった。



同じ介護度や共通して取り組みたい運動レクの内容を希望している他入居者同士でグループとした。
【介護度 1～2】【介護度 3～5】2グループ

倫理的配慮

本人・家族と倫理委員会の承認を得ている

DAM：株式会社第一興商

FREE DAM HD (DAM-F750HD + DSR-F75)

https://www.dkkaraoke.co.jp/business/karaoke_service/products/freedam_hd/

1. DAM の機能を活用

食事動作・移動・移乗・階段昇降等、日常生活の中で必要となる動作に特化した体操で入居者の満足度も高い。中でも入居者 A 氏（89 歳男性 要介護度 4）は DAM で立位・下肢運動を集中的に取り組んだことで ADL に大きな変化がみられた

（下記表は取組前後のリハビリスタッフによる機能訓練計画書の評価・プログラム内容の比較）

【取組前 R5.12月】

※能力評価(リハビリ)

評価日 令和 5 年 11 月 27 日

ROM: 感覚: 視力低下あり 認知機能: MMSE23 点(R5.4) 起立: 手すり使用し全～中程度介助 立位保持: 手すり使用し全介助～中程度介助 起立・立位保持に関しては本人の意欲によって介助量変動する。

取組前は、車椅子からの立ち上がりには支えが必要であり、立位保持はできず、移乗はスライディングボードを使用していた移動は、車椅子の足こぎで 25m 程短距離移動は可能であったリハビリ評価を受け、プログラム内容は、

- ① 肩関節の屈曲、肘関節の進展、
- ② 起立訓練
- ③ ベッド⇄車椅子間の移乗動作を行った

長期目標	移乗動作が自分でできる			
短期目標	手すりを持ち立位がとれる			
	プログラム内容	時間	頻度	留意点
①	肩関節の屈曲、肘関節の伸展	5分	毎日	
②	起立訓練	5分	毎日	手すり把持して行う
③	移乗動作(ベッド⇄車椅子)	5分	毎日	手すり把持して行う

【DAM 導入後 R6.4】

※能力評価(リハビリ)

評価日 令和 6 年 3 月 24 日

ROM: 感覚: 視力低下あり 起立: 手すり使用し軽度介助。立位保持: 手すり使用し軽度介助。
1分48秒。歩行: 平行棒内歩行2.5m×2。疲労+。

DAM と立位・移乗動作の結果、支持物に掴まれば補助なしで立位・移乗動作が可能となり、車椅子の足こぎでは移動距離が 25m から倍の 50m となった。
また、下肢に力が入るようになったことで平行棒内で歩行動作が可能となり、リハビリ評価により訓練メニューに平行棒歩行訓練が追加された。

長期目標	移乗動作が自分でできる			
短期目標	手すりを持ち立位がとれる			
	プログラム内容	時間	頻度	留意点
①	移乗動作(トイレ⇄車椅子、ベッド⇄車椅子)	5分	毎日	
②	起立訓練	5分	毎日	手すり把持して行う
③	平行棒内歩行訓練(2.5m×2)	5分	毎日	手すり把持して行う

結果

2. 職員の体制の見直し、介護度・目的でグループ分け

<p>グループ①【介護度 1～2】 入居者10人に対し 職員1名のみ配置 入居者の声：*やりたかった体操が出来る。みんなが同じペースで運動が出来るからやりがいがある。 *レベルの高い体操が出来て充実感がある</p> <p>グループ②【介護度3～5】 入居者5～8名に対し DAM 活用+職員2名配置。→常時、入居者の側で体操の補助が可能。 入居者の声：*同じ悩みを持った人と一緒にできるのが嬉しい。周りに遠慮することがなくなり参加しやすくなった *職員さんが側で補助してくれるので安心できる。分からないことがすぐ聞けるようになった</p>			
【職員業務】	通常レク	DAM 導入後	備考
声かけ・案内にかかる時間	15分～20分	10分前後	習慣化してきた
準備にかかる時間	10分	5.6分	準備が DAM のみで済む
実施時間	30～40分	15分（1グループ当り）	スムーズに行える
<p>→DAM 導入後、レクリエーションの所要時間40分減少した</p> <p>課題であった要介護 3～5の入居者に対しては身体の状況に合わせてピンポイントの運動プログラムに取り組んでもらい、体操の説明は DAM がしてくれることでその分、手の空いた職員が入居者の体操の補助につくことができました。同時に職員が全員につくことは難しいが以前のレクリエーションと比較し直接関わり、体操の補助を行う時間、対応できる入居者の人数が格段に増えた。</p>			

結果に基づく考察	<p>1. DAM の機能を活用 入居者の目的に合わせてプログラムを提供できることによって、「自分には合わないから」と参加を断念する入居者が減り、同じ目的や身体の悩み等、共通している入居者同士が集まることで仲間意識も高まり意欲向上にも繋がったと考える。 また、ピンポイントで向上したい部位の体操を選ぶことが出来ることで、A 氏のように下肢筋力が向上し平行棒内での歩行が可能となったのではないかと考える。</p> <p>2. 職員の体制の見直し、介護度でグループ分け ・DAM の映像（テレビ）を見て体操してもらうことで主体となっていた職員はより近い距離で入居者の補助ができるようになった。 配置する職員が 1 人減っただけでも全体のフォロー役としてレクリエーション・介護業務が円滑にすすめられるようになった。 ・グループ分けをすることで入居者の個人差をお互いが気にすることがなくなり、レクリエーション中の雰囲気もよりいっそ良くなりグループごとで目的や目標を設定して行ったことで、A 氏の立位保持を安定させたい要望に当てはめることができ結果として機能向上することができたと考える。</p>
----------	--

今後の課題	<p>DAM を通して一人一人の入居者の日常生活に必要な機能の維持・向上を図り、その結果、職員配置が軽減され業務量の見直しができる。</p> <p>今後は、入居者に寄り添いながらケアの質向上と共に同じ課題を抱えている他事業所にも DAM の導入により展開できるのではないかと考えている。</p>
-------	---

引用文献 参考文献	
--------------	--

介護付きホーム研究サミット2024 第12回事例研究発表全国大会

優秀賞受賞者 研究発表概要

NO.2

法人名	SOMPO ケア株式会社		
施設名	そんぼの家 三浦		
発表者名	三浦 由紀	役職	ホーム長
研究タイトル	SOMPO 流「子ども食堂」が未来社会を創り出す ～地域と繋がる・拡がる・支え合うことの大切さ～		
ホーム所在地	〒238-0244 神奈川県三浦市白石町21-15		
開設	2008年 4月 1日	定員	50名
平均介護度	2.3	職員比率	3 : 1
研究の目的	<p>SOMPO ケアは、ご利用者さまと介護職員、未来社会にとっての「三方よし」の実現を目指しており、SOMPO 流「子ども食堂」の目的も同じ「三方よし」の実現をしていくことを目的としている。地域の関係機関先へ SOMPO 流「子ども食堂」の認知活動をする際、SOMPO ケアで開催している子ども食堂が「困窮家庭の救済が目的」という一般的な子ども食堂のイメージを強く持たれており、多世代間の交流という SOMPO 流「子ども食堂」の目的が浸透していない状態であった。</p> <p>このことから、SOMPO 流「子ども食堂」の目的である「三方よし」の実現をするためには、そんぼの家 三浦で開催している SOMPO 流「子ども食堂」がご利用者さまの生きがいの創造、働く職員の働き甲斐の向上、また地域社会への貢献、これらの「三方よし」がどのように実現されていくかを検証した。</p>		
研究の背景	<p>三浦市では地域課題として「子ども達の遊ぶ場がなくなっている」「学校以外の学びの場がなくなっている」という地域課題の解決に苦慮しているという現状があった。このことから、多世代間の交流が目的である、SOMPO 流「子ども食堂」が地域課題の解決に一翼を担うことができるのではないかと考え、SOMPO 流「子ども食堂」が未来社会を創り出すことへのチャレンジを実施した。</p>		
研究方法 ①対象 ②期間 ③内容 ④方法	<p>① 対象：三浦市内の地域で子どもに関係する機関先 ② 期間：2022年12月～2023年9月 ③ 内容：1. 地域への SOMPO 流「子ども食堂」の認知拡大 2. 地域への SOMPO 流「子ども食堂」の開催目的の浸透 この2つの課題を解決するために関係性の構築を図っていく。 ④ 方法： 主な地域の関係機関先へのアプローチ 1) 三浦市教育委員会の校長会議への説明 SOMPO 流「子ども食堂」の開催目的について説明する。毎月1回、三浦市内小学校（全8校）への「子ども食堂」のポスターの貼りだしとチラシの配布の了承をいただき実施する。 2) 三浦市の交流センター主催のマッチングイベントへの参加 SOMPO 流「子ども食堂」の運営目的について説明する。イベントの参加者は、三浦市の農家の方々、三浦市内子育てサークル、未就学児の支援団体、三浦市役所の協働課など多くの地域関係者が参加される。参加者との意見交換の良い機会となり、また参加者同士の繋がりも生まれた。 3) 三浦市社会福祉協議会への説明 SOMPO 流「子ども食堂」の運営目的について説明する。そんぼの家 三浦での開催時にボランティアの支援をいただけることになった。 4) 三浦市民生委員会への説明</p>		

	<p>三浦市民生委員会に参加し、SOMPO 流「子ども食堂」の運営目的について説明する。</p>
<p>結果</p>	<p>三浦市内の地域で子どもに関係する機関先に対してアプローチの結果、1. 地域への SOMPO 流「子ども食堂」の認知拡大 2. 地域への SOMPO 流「子ども食堂」の開催目的の浸透をすることで機関先と関係性の構築ができた。</p> <p>以下詳細</p> <p>1. 地域への SOMPO 流子ども食堂の認知拡大ができた</p> <p>開催当時は子ども達の参加は1～4名、ご利用者さまの参加も2～3名程度だったが、現在は子ども達の参加は、三浦市内の地域の子供達が10名以上、ご利用者さまの参加も10名以上と増えた。</p> <p>2. 地域への SOMPO 流子ども食堂の目的の浸透ができた</p> <p>活動を通して、SOMPO 流「子ども食堂」は、三浦市には類を見ない、特別な「子ども食堂」としての位置付けとなった。また、開催目的の浸透をしていくことで、関係機関先との繋がりの拡大となった。特に三浦市教育委員会と三浦市内の小学校に対して、SOMPO 流「子ども食堂」の開催目的への正しい理解を得たことが、開催目的の浸透に大きく影響した。</p>
<p>結果に基づく考察</p>	<p>そんぽの家三浦での SOMPO 流「子ども食堂」において、ご利用者さまと介護職員、未来社会にとつての「三方よし」の実現に繋がる結果を得ることができた。実事例からの考察は以下 6 点である。</p> <p>1) <u>子どもの笑顔がご利用者さまの笑顔へ、また働く職員の笑顔へ繋がる「笑顔の相乗効果」</u></p> <p>開催を継続していくと「次の子ども食堂で、子どもたちに絵を渡したい」「子どもたちと、豆を箸で摘まんでお皿に移す遊びを一緒にしてみたい」など、ご利用者さまから運営に対しての提案が出るようになった。提案を実施していくことで、子どもの笑顔、ご利用者さまの笑顔も増えていき、また働く職員が笑顔になっていくという相乗効果に繋がったのではないかと考える。</p> <p>2) <u>ご利用者さまの生きがいの創造</u></p> <p>ご利用者さまとの遊びの時間で、なかなか輪に入れない子どもを、ご利用者さまが気遣い、声をかけて、その輪に入れない子どもと1対1で遊びを始めた。日常よりもご利用者さまに活気が見られる場面が生まれたと考える。</p> <p>3) <u>子どもの保護者との繋がり</u></p> <p>参加している子どもの保護者との繋がりもできた。子ども達が楽しそうにご利用者さまと過ごしている様子などの写真をお土産と一緒に渡し、その後、保護者の方へ連絡を取り、感謝の気持ちを伝えた。「好き嫌いが多いため、出された食事が食べられるか心配」と不安を口にしていた保護者に対して、食事内容や参加時の様子について報告したところ、「外だと食べられるようで、ほっとしました。」と子どもの参加に対して安心していただくことができたと思われる。</p> <p>4) <u>子ども食堂の認知度拡大による地域関係者との繋がり</u></p> <p>地域への SOMPO 流「子ども食堂」の認知拡大、目的の浸透の活動から、地域関係者との繋がりが増えていった。特に三浦市社会福祉協議会からつながった三浦市の交流センター主催のマッチングイベントの参加で多くの地域関係者と繋がったのではないかと考える。</p> <p>5) <u>地域課題に対しての SOMPO 流「子ども食堂」の役割</u></p> <p>地域関係者と繋がっていくことで、地域の課題を知る機会が生まれた。三浦市では「子ども達の遊ぶ場がなくなっている」「学校以外の学びの場がなくなっている」という地域課題の課題解決に苦慮しているとのことであった。そんぽの家三浦は、未就学児から中学生、子ども達の保護者が参加しており、地域における多世代間の交流の場となっている。また、参加人数の拡大と多世代の交流の効果で、開催ホームが子どもの自己成長（学び）に繋がるコミュニティの場として確立していった。実際にあった学びの例として、保護者から「食事の準備や片づけをしてくれるようになった」と喜びのご意見をいただけたと思われる。</p> <p>6) <u>SOMPO 流「子ども食堂」の運営を通して、職員の働き甲斐の向上</u></p> <p>職員に対して子ども食堂の目的について繰り返し説明をしたが、「やらされている感」が強く、残念ながら働き甲斐の向上に繋がらない職員も多かった。管理者のみでの運営は、SOMPO 流子ども食堂の目的である「三方よし」の実現にはならない。職員を運営に巻き込むため、職員がどうしたら活躍できるかを考え、職員個々の特徴を考慮し、適材適所での担当を考案した。子どもと遊ぶことが得意な人は「遊び担当」や「配膳担当」、どちらも苦手と話す人には「子ども達のプレゼントづくり担当」とした。次第に職員の意識に変化があり、「子ども食堂が楽しい」と話す職員が多く見られるようになったと考える。</p>

<p>今後の課題</p>	<p>『SOMPO 流子ども食堂の継続的な運営により「三方よし」の実現について』 SOMPO 流「子ども食堂」を継続して運営することで、施設で働く職員が「SOMPO 流の介護」三方よし！の本当の意味を実感することができた。子どもの笑顔→ご利用者さまの笑顔→職員の笑顔の相乗効果がご利用者さまの生きがいに大きな影響を与えることとなった。参加しているご利用者さまの表情は活き活きとしており、月1回開催する「子ども食堂」をととても楽しみにしている。</p> <p>今後、この SOMPO 流子ども食堂をより活発にし、10年～20先も継続した運営が課題と言える。</p>
<p>引用文献 参考文献</p>	

介護付きホーム研究サミット2024 第12回事例研究発表全国大会

優秀賞受賞者 研究発表概要

NO.3

法人名	株式会社ベネッセスタイルケア		
施設名	メディカル・リハビリホーム ボンセジュール秦野渋沢		
発表者名	坪井 佑介	役職	副ホーム長
研究タイトル	その方の人生を辿って見つけた「ありたい姿」に寄りそうケア ～ご入居者の QOL 向上を目指して～		
ホーム所在地	〒259-1326 神奈川県秦野市渋沢上1-6-60		
開設	2012年 4月 1日	定員	101名
平均介護度	2.64	職員比率	2.5 : 1
研究の目的	A 様の QOL 低下の問題を解決するために取り組みを行った。A 様の QOL 低下の問題を解決する為には、もっと深く A 様を知る必要があると考え、多職種でカンファレンスを行う中で QOL 向上のヒントは「人生」の中にあるのではないかと推察し、アセスメントを取り直すことから始めた。		
研究の背景	ご入居者 A 様の QOL は低下していた。要因として BPSD と入浴拒否の2つが考えられた。BPSD では、食事、アクティビティ(以下、アク)・行事の場面で、易怒性や妄想により他ご入居者やスタッフとトラブルがあった。入浴拒否では、衣類が盗まれるのが嫌という発言があり入浴拒否されることが何度もあった。社交性もあり、お話す事が好きな方であるという印象であった A 様の笑顔が失われている現状があった。一方で、スタッフは A 様に「喜んで欲しい」との思いでケアを行っていたが、突然現れる易怒性などによる BPSD により顔を窺う様な「受け身的なケア」になり、スタッフの自信と笑顔が失われていた。		
研究方法 ①対象 ②期間 ③内容 ④方法	<p>①対象：ご入居者 A 様（80代女性,要介護3,アルツハイマー型認知症）</p> <p>②期間：2023年6月～9月末</p> <p>③内容：QOL 向上のヒントは「人生」の中にあるのではないかと推察しアセスメントを取り直し、当社のシステムやツールを活用しながら A 様の QOL 向上を目指した。</p> <p>④方法：</p> <p>1) 「A 様の人生についてヒアリングにより情報収集」 まず A 様の人生についてヒアリングにより情報収集した。幼少期から現在までの人生を辿り、家族構成や出来事、エピソードの背景にある A 様の思いなど QOL 向上へのヒントとなる情報を集めるため A 様とご家族様にヒアリングを行った。</p> <p>2) 「ヒアリングは多職種で複数回実施」 ヒアリングは多職種で複数回行った。その理由は、様々な視点からの情報を得ること、話し手と聞き手の信頼関係を作るためである。自分の人生を尋ねられた際に最初から本音で話すことができるのかと私たち自身の立場になって考えたとき、繰り返し話を聴いてくれることで初めて本音を話せるのではないかと考えた。</p> <p>3) 「観察ポイントを2つ設定」 A 様へのヒアリング時の観察ポイントを2つ設定し、表情や口調などから得られる感情の変化と、繰り返しお話す内容などから A 様の価値観やこだわりを見つけるとした。</p> <p>4) 「ヒアリングで得られた情報を快・不快に分け可視化」 観察ポイントを基にヒアリングで得られた情報を A 様の感情の動きに合わせて快・不快に分けて可視化した。図1で可視化したグラフを示す。感情の変化に着目し「こんな性格だから私を嫌いな人もいるわよ」という一見ネガティブな内容の発言も対話時の表情が実に晴れやかであったことから、A 様のこだわりや信念といったポジティブな内容として捉えた。また繰り返し対話時に登場し、幼少期より A 様を頼り、いつも一緒にいた妹様の存在は A 様を QOL 向上に導くキーパーソンと捉えた。逆に、人の顔を窺う人が嫌いで、自分の意見を曲げてまでの人間関係は望まないというゆずれない思いも聞くことができた。</p>		

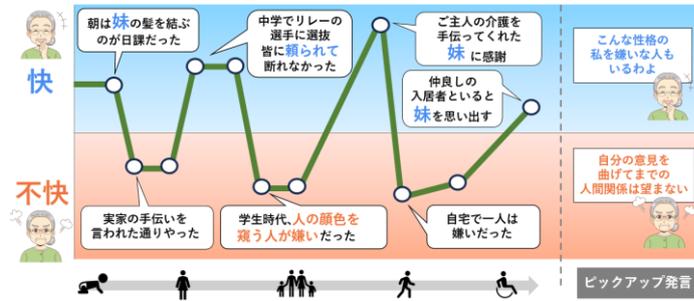


図1：観察ポイントを基にヒアリングで得られた情報をA様の感情の動きに合わせ快・不快に分けて可視化したグラフ

5) 「人生を辿って見つけたありたい姿を推察し、ありたい姿をA様の目標へ」

ここまで得られた情報から、A様の人生を辿って見つけた「ありたい姿」とは、「心が通い合うと実感できる人との交流の中で人の役に立ち頼られる存在で自分に自信を持って笑顔で生活出来ている」と推察した。この「ありたい姿」をA様の目標とした。

6) 「ありたい姿に近づくために生活の場面を見直し、ケアを変更」

A様が「ありたい姿」に近づくために、特にBPSDが見られている食事、アク・行事、入浴の場面を見直し、ケアを変更した。食事の場面では、様々なご入居者との交流が多い環境だったが、本当は心通い合うと実感できる方のみとの交流を望んでいたのだと気づき、妹様の雰囲気によく似た方へ了承を得て食事席を変更した。アク・行事の場面では、スタッフはA様の顔を窺うように接していたが、A様は人の顔を窺う人が嫌い、頼られるのが好きだと気づき、スタッフは顔を窺うような態度を止めA様を快に導く頼るようなお声掛けに変えた。入浴の場面では、衣類紛失に対する説明がスタッフによって様々であったことでスタッフは心通い合わない人とA様に捉えられていたため、入浴お誘い時の声掛けルールを統一し、信頼回復に努めた。声掛けルールとしては、①「洗濯物はホームで洗濯して今日までに返却しますね」②「下着だけ替えましょうか？」①②の順で「～らしさ」を意識した強制せずお願いするような声掛けをするとした。ケアの変更を行ったのは2023年7月頃となる。

7) 「ありたい姿に近づいているか評価する指標を設定」

変更したケアにより、A様が「ありたい姿」に近づいているかを評価する指標を設定した。指標は快な場面の件数、不快な場面の件数、入浴の回数とした。快な場面とは、A様に笑顔が見られるなど「ありたい姿」に近づいている様子が見られる場面とした。不快な場面とは、A様に妄想や易怒性といったBPSDが見られるなど「ありたい姿」から遠ざかっている様子が見られる場面とした。スタッフはサービスナビゲーションシステムを活用し、快な場面、不快な場面、入浴の回数を記録した。<補足> サービスナビゲーションシステム（通称：サーナビ）は、自社開発した記録システムである。PCやスマホから簡単に記録・情報共有できることで紙の資料での記録・情報共有にかかっていた多くの時間が削減され、ご入居者へ寄り添う時間が増えている。

結果①：「快な場面は倍増し、不快な場面は9月から減少」

快な場面・不快な場面が見られたらサーナビに記録し、その記録されたデータを基にマジ神AIが可視化したグラフから快な場面・不快な場面の件数を確認した。図2にそのグラフを示す。図2より、6月と比べケア変更後の7月以降の快な場面の件数は倍増し不快な場面の件数は9月から減少した。具体的に、快な場面は「6月:37件」から「7月:88件,8月:70件,9月:81件」に増加した。不快な場面は「6月:14件,7月:14件,8月:27件」から「9月:10件」へ減少した。

結果

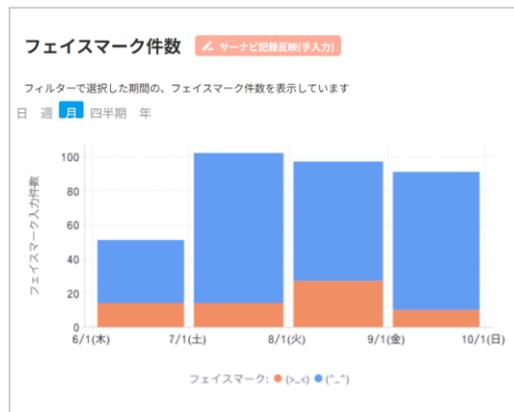


図2：快な場面・不快な場面の件数グラフ（今回の場合、「快な場面:(^_^)」「不快な場面:(>_<)」となる）

<補足>マジ神 AI は、サーナビの記録や、睡眠や排泄センサーが導入されていれば、そのデータを含めてグラフ化など「可視化」を行うことができる。また、機械学習により、取得したデータから「適切なケアのフィードバック」を行うことができる自社開発のデジタルツールである。当社の介護付きホームにマジ神 AI は導入されており、今回は「可視化」を活用した。「可視化」を活用することで、スタッフはご入居者の長期的の変化を捉えられる。マジ神 AI では、例えば、食事量や体重変化、他にも事故件数やバイタルサインなどが可視化され、週、月、半年とグラフの表示を切り替えて確認できる。これにより、毎日、人がシフトで入れ替わる介護現場では、漏れてしまいがちな、ご入居者の長期的な変化に気付ける。

結果②：「入浴拒否の回数は減少し、入浴実施の回数は増加」

図3に A 様の入浴拒否の回数、図4に A 様の入浴実施の回数を示す。図3・図4より、6月以前は月に3回以上あった入浴拒否の回数が減少し、入浴実施の回数は増加した。具体的に、入浴拒否の回数は「3,5,6月は3回」「4月は4回」であったが、ケア変更後の「7,9月は0回」「8月は1回」と減少した。また、入浴実施の回数は「3,6月は6回」「4月は4回」「5月は7回」であったが、「7,8月は8回」「9月は9回」と増加した。

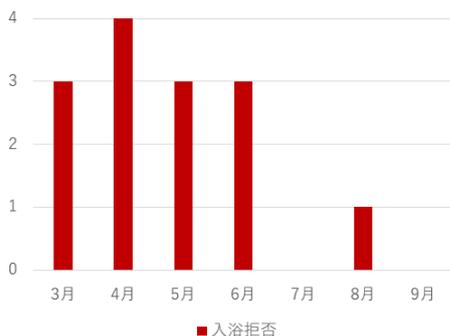


図3：A 様の入浴拒否の回数

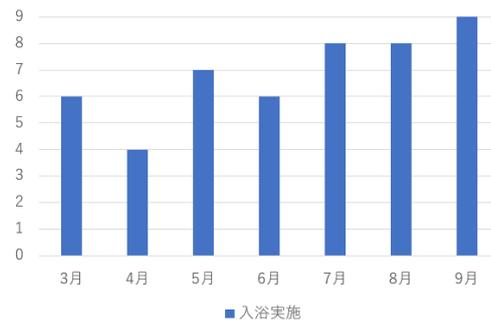


図4：A 様の入浴実施の回数

結果に基づく考察

考察：「人生を辿って見つけたありがたい姿から見直したケアの実践がご入居者の QOL 向上に繋がる」
 快な場面は増加し、笑顔を見せられることが増えた。不快な場面は減り、BPSD が減少した(易怒性や妄想が聞かれなくなった)。入浴拒否は減り、入浴実施の回数が増えた。その結果から人生を辿って見つけたありがたい姿から見直したケアの実践がご入居者の QOL 向上に繋がると考えた。幼少期から現在までの人間関係だけでなくどのような人間関係を望んでいたのかそこまで深く情報収集したことでありがたい姿に近づく周辺環境を作ることができた。取り組み開始時88歳で合った A 様は「あと2年位生きられれば良いわよ」と投げやりにおっしゃっていたが、3か月後には「100歳まで生きていたいわ」と笑顔でおっしゃるようになった。

今後の課題

課題：「ありがたい姿は変化することがあるため、多職種で変化を見逃さないことが必要」
 取り組みの中で人に頼られることが嬉しいと感じていた A 様がスタッフや他ご入居者を頼りにするような発言や行動が見られるなど A 様にとって不快と捉えていたことを快と感じているご様子が見られた。A 様だけでなくご入居者のありがたい姿は変化するという認識を持ち、多職種で変化を見逃さないよう観察していくことが今後、更に QOL 向上を目指す上での課題であると感じた。最後に、A 様に対してのケア方法が分からず、自信と笑顔を失っていたスタッフは今では笑顔で自信を持って A 様のケアを行っている。図5に、ご入居者 A 様とスタッフの1人の取り組み実施後の写真を示す。正解がないと言われている認知症ケアにおいてご入居者の想いを深く知ろうとする気持ちを持ち続け、ありがたい姿を探す「歩み」を止めずに寄り添い続けることがご入居者の QOL 向上とスタッフのやりがいと繋がるとホーム全体で実感できた。



図5：ご入居者 A 様(右)とスタッフの1人(左)の取り組み実施後の写真

引用文献
 参考文献

介護付きホーム研究サミット2024 第12回事例研究発表全国大会

優秀賞受賞者 研究発表概要

NO.4

法人名	SOMPO ケア株式会社		
施設名	そんぼの家 十番町		
発表者名	濱島 潤	役職	ケアスタッフ
研究タイトル	ご入居者様の満足度、生活の質の向上を目指して ～ACP の実践 & ICT を用いた見える介護～		
ホーム所在地	〒454-0055 愛知県名古屋市中川区十番町1-302		
開設	2003年 1月	定員	69名
平均介護度	2.28	職員比率	3 : 1
研究の目的	<p>生活の困りごとの解決をし、全てのご入居者様が充実した毎日、人生に楽しみがある生活とは何かを考え、実現することが私たち介護士の目指すべきやりがいであり、それが人間尊重へと導いていくと考える。本取組みはそんぼの家十番町のすべてのご入居者様に人が人にしかできない「対話」「コミュニケーション」を通してご入居者様の本来の夢、楽しみ・ご希望をお聞きし、実現し、満足度、生活の質向上。また、ICT(以下、社内呼称：egaku とする)を用いて様々な困り事や不安を解決することで、生活に楽しみや生きがいを持てる生活の実現を目的とした。</p>		
研究の背景	<p>そんぼの家十番町では従来ほとんどが、外出・外食・買い物などの屋外レクリエーションは自立度の高いご入居者様が中心であった。その為、介護度の高いご入居者様一人ひとりの楽しみ、幸福である生活の実現については全く不十分であり、様々な身体的・精神的苦痛を抱えているご入居者様の日常の楽しみ・幸福につながる援助が充分ではなく QOL 向上が課題であった。今後、介護度が高く、身体的・精神的問題を抱えているご入居者様に楽しみを持って頂きさらに満足度を上げる生活ができるように生活の質を見直す必要があった。</p>		
研究方法 ①対象 ②期間 ③内容 ④方法	<p>① そんぼの家十番町全ご入居者様69名、スタッフ23名 ② 2023年7月～継続中 ③ ・ご入居者様のご希望や生活の満足度につながる援助、ACP の聞き取りと実践 ・サービス品質課との egaku を用いた毎月の非定時援助軽減の取組み ④ ご入居者様のご希望や生活の満足度につながる援助、ACP の実践</p> <p>2023年7月から69名全てのご入居者様を対象にケアプラン更新に合わせて聞き取りから要望の実現に努めた。より切実な思いや夢を実現する為に、思い出話からご希望や夢の聞き取りをご入居者様のみでなく、ご家族様にも行い、ご入居者様の QOL 向上の為に時間(社内呼称：クオリティタイム)を活用し、居室担当のご入居者様と聞き取りから実施まで行った。尚、介護スタッフの各居室担当は4～5名のご入居者様を受け持っている。</p> <p>・egaku を用いた非定時援助軽減の取組み</p> <p>十番町では、困り事や不安からくるナースコール(以下、NC とする)が多いご入居者様が数名おられた。ナースコールログ導入された2023年7月から様々なデータを統合・可視化し業務効率化を実現するデータ活用サービス「egaku」を用いて NC が増加しているご入居者様を対象に実施。導入として NC 軽減に向けた取組みの必要性について研修動画を視聴、カンファレンスでアセスメント時に観察・記録して欲しい内容を共有し、NC 状況、鳴り方(一度のご要望に対し一度のコールなのか、何度もコールを押されるのか)を情報収集した。それをもとに月に2回 NC の多いご入居者様を対象にケアリーダー(社内呼称：ケアコンダクター)・介護支援専門員・看護師が NC の増減・時間帯をアセスメント、対策、今後の方向性の検討をした。翌月に取組みの評価・対策へとつなげていった。</p>		

① ご入居者様のご希望や生活の満足度につながる援助、ACP の聞き取りと実践

2023年7月～2月取り組み状況

101	昔話をしながら散歩がしたい	116	第九合唱を聞きたい	214	家に帰りたい	308	家族でご飯が食べたい
102	おいしいコーヒーが飲みたい	117	縫物がしたい	215	買い物に行きたい	309	美味しいコーヒーが飲みたい
103	カラオケに行きたい	118	家に帰りたい	218	お墓参りに行きたい	310	マッサージをして欲しい
104	おいしいコーヒーが飲みたい	119	美味しいかきを食べたい	219	外食で美味しいものを食べたい	311	近所のスイーツ屋に行きたい
105	家に帰りたい	120	本を買いに行きたい	220	家族に会いたい	312	家族と散歩がしたい
106	ブルーボネットに行きたい	121	カニを食べに行きたい	221	お墓参りに行きたい	313	本屋に行きたい
107	近所を散歩したい	201	昔住んでた街に行きたい	222	家族に会いたい	314	初詣に行きたい
108	マジックショーが見たい	202	奥様に会いたい	223	日光浴がしたい	315	中華料理を食べに行きたい
109	家族ともっと会いたい	203	将棋がしたい	302	ピアノが弾きたい	316	散歩がしたい
110	三味線が聴きたい	204	家に帰りたい	303	熱田神宮に行きたい	317	家族とお寿司を食べたい
112	近所を散歩したい	205	奥様と思い出の喫茶店に行きたい	304	美味しいスイーツが食べたい	318	美味しい紅茶の飲みたい
113	近所を散歩したい	206	孫とご飯を食べに行きたい	305	お寿司が食べたい	319	お寿司屋に行きたい
114	塗り絵がしたい	207	散歩がしたい	306	美味しいコーヒーが飲みたい	320	民謡を聴きたい
115	近所の友達に会いたい	208	買い物に行きたい	307	家に帰りたい	321	クラシック音楽を聴きたい

A 様 (90代男性 要介護5 B2/Ⅲa)

「家族で行った思い出の白鳥庭園に行きたい」

PICC カテーテルで24時間ポンプ管理で点滴をされている A 様。以前は旅行が好きで家族様とよく出かけられていた。しかし、現在の様子にご家族様も「私たちでだけで外出するのは不安だからもう外出はできない」と諦められていた。そこで A 様のご希望を実現する為に、まずは「座位保持の強化」をしました。2024年1月コロナ感染その後入院となり、2月には退院されるが、下肢筋力低下、体幹の衰えがみられ長時間の座位保持は困難で傾くがみられた為、訪問リハビリを週2から週3回に増やし生活リハビリで車椅子への移動訓練を実施しました。

また、白色粘稠痰が多量、SPO2低下がみられる為外出前後に「口腔ケア、吸引」を増やしました。

さらにエラー音がならないように輸液ルートの工夫とポンプ管理が介護スタッフではできない為「看護師同伴で外出することで家族様も安心して頂けた。

このような取り組みもあり、看護師同伴で思い出の白鳥庭園に外出ができた。最近では傾眠傾向であった A 様もきれいな桜が見たいとの要望があった為実現できた。「次はどこに行こうかな」と次回の企画を楽しみにされている。

② egaku を用いた非定時援助軽減の取り組み

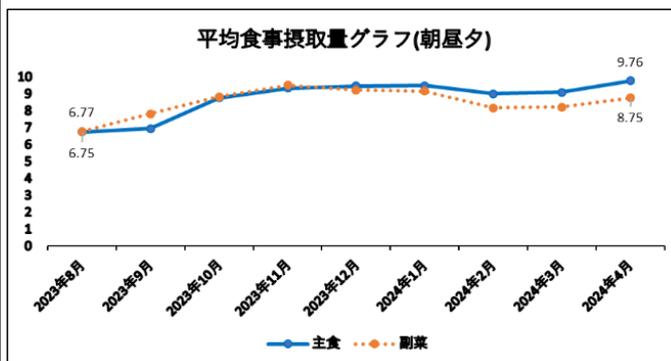
B 様 (90代男性 要介護3 B1/Ⅰ)

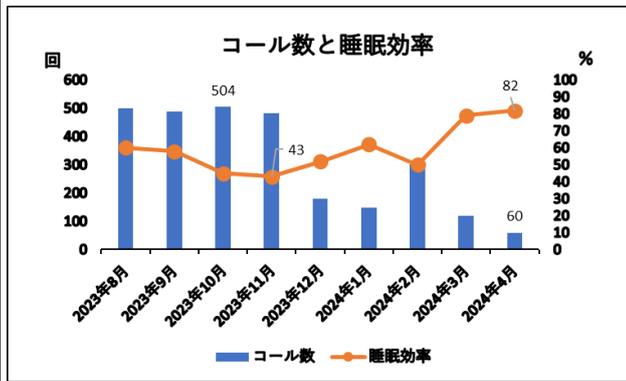
既往歴：脊柱管狭窄症 脳梗塞

現状歴：慢性肺炎 気管支喘息 白内障 緑内障

B 様は2023年6月頃から「頻尿」「夜間眠れない」「便秘」「家族と会えなくて寂しい」という困りごとがあり、それが頻コールになっていた。趣味であった音楽を聴くことにも興味がなくなり食事は減少していた。それを他職種が連携し、まずは本人様への排尿時の切迫感、残尿感の聞き取り、キューブスキャンで残尿量の測定を実施。また、面会機会が少ない家族様が4～5日に一度ヨーグルト・バナナを持ってきて頂く面会の回数が増え本人様の満足にもつながった。さらに NC ログを活用し、NC の増減・時間帯を分析し、排泄の訴えが多かった時間帯に排泄援助を追加した。内服薬の調整や日中の活動量の検討、援助の適正化を行った。食事は向上したが、コール数や睡眠状況は2023年11月まで変わらなかった。しかし、2023年12月頃から日中は決まった時間に離床してイベント等に参加して楽しんでもらい夜はプロチゾラム0.25mg（催眠鎮静剤）を調整したことで睡眠効率(睡眠時間÷ベッドにいた時間×100)が向上し、コール回数が減少した。その後の内服薬の調整を繰り返し、2024年4月にはコール数も激減し、夜間に寝て、日中はオンラインアクティビティや趣味であった音楽を聴くことも出来ており、生活に楽しみをもって過ごしている。また、外出されるようになり、外食も楽しめるようになった。

結果





結果に基づく考察

従来、個別性に合わせたレクリエーションなどを楽しみのある豊かな生活についての取組みは充分であった。しかし、ACP の実践を通して、担当スタッフが「もっとご入居者様に喜んで頂きたい！」とスタッフ間でご入居者様の ACP の取組みについて情報交換ができるようになり、スタッフにもメリットがあることを実感した。さらに「また行きたい・やりたい」というご入居者様の思いが精神面で良い影響となりリハビリへのモチベーション向上につながることとなった。しかし、日常的な希望要望にとどまるケースや身体・経済的な問題から実施まで至らなかったケース、ご希望内容の規模を縮小して実現することも多々あった。さらに、ご本人様は「家族様と行きたい」というご希望があっても家族様に時間がなく、また取組みに関心を持って頂けなかったことで、スタッフが同行することも多かった。今後、家族様への取組みの理解が必要と考える。

しかし、取組み当初は「旧友に会いたい」「〇〇へ旅行に行きたい」など本気な思い、夢を実現することがご入居者様は望まれていると考えていたが、本当にそれを望まれているのかという疑問がでてきた。もちろんまだ本音が聞き出せていない可能性もあるが、「家族に会いたい」「近所を散歩したい」「美味しいご飯が食べたい」といった日常の何気ないご要望や「今のまま穏やかに生活したい」という声が多かった。ご入居者様は日常のささやかな幸せや平穏な日々の実現を求め、その先に夢があると考えた。

また、egaku を活用したご入居者様の困りごとの解決は確かな手ごたえを感じた。睡眠状況の確認や NC 回数など客観的な数値があることでより正確なデータ分析に用いること援助の適正化を実施できた。さらに、排泄時間や体調変化を効率的に把握できる為、援助スケジュールの適正化や客観的なデータをご家族様や往診医に説明することで納得して頂けることが増えた。1名は急変でご逝去され、7名を対象に6名はコール減少という結果になった。これまで NC が多いご入居者様に対しては常態化しており、業務負担が増加していた。NC は「不適切ケア」の温床になるので早急に解決する必要がある為、本取組みはご入居者様、スタッフにとって相互利益があったと実感した。

「人間」は心を持ち、相手の気持ちに寄り添うことができ、言葉の裏に隠された感情を察することができ、人と人の温かいコミュニケーションをとることができる。今後も介護士としての専門性を高め、egaku などの「テクノロジー」を活用することで、介護サービスの品質を向上させ、ご入居者様の豊かな生活に貢献する弊社が目指す「未来の介護」を体現していきたい。

今後の課題

スタッフだけでお付き添いするのではなく、ご家族と一緒にご入居者様の希望を叶えられるように日程や予定・内容を一緒に考えることでご家族のケアへの参加、ご入居者様との関係性のかかわりが継続につながると実感した。A 様のように医療的ケアが必要な方には訪問看護のプライベートサービスを利用することで家族様との外出が可能になる。

今後も毎月非定時援助軽減の取組みの継続はもちろんのこと、「予測する介護」に活用したい。egaku や睡眠測定センサーなどを活用することで、状態変化により迅速に気づくことでき入院率の改善や未然に事故を防ぎ、ADL の維持・改善が可能になる。それにより、健康寿命が延び、楽しみ・生きがいのある生活の継続が出来ると考える。そして最終的にはご入居者様が心底思っている本当の夢・ご希望・思い出を聞き取り、その実現を目指したい。

引用文献
参考文献

介護付きホーム研究サミット2024 第12回事例研究発表全国大会

優秀賞受賞者 研究発表概要

NO.5

法人名	株式会社チャーム・ケア・コーポレーション		
施設名	チャームプレミア目白お留山		
発表者名	山根 晴香	役職	一般職
研究タイトル	若年性認知症と向き合っ て ～Smile Again～		
ホーム所在地	〒161-0033 東京都新宿区下落合4-19-5		
開設	2017年 2月 1日	定員	60名
平均介護度	2.42	職員比率	2.5 : 1
研究の目的	当ホームに若年性認知症の方が入居されたことをきっかけに、チャームの理念でもある「お一人おひとりの価値観を大切に、魅力的な生活を提案」することを目的として、医療面・介護面などあらゆる職種からのアプローチがどのような影響を及ぼすのかを検証する。		
研究の背景	現在、日本の認知症患者数は約600万人、さらに2050年には1000万人に増えると予測されている。中でも若年性認知症と言われる65歳未満での発症は約3万7000人とされ、今後さらに増加の一途を辿ると見込まれる。若年性認知症の発症年齢は54.4歳。『働き盛り』と言われる年代での発症は、本人はもとより家族や周囲の人々は経済的、精神的に大きな影響を受けると思われる。		
研究方法 ①対象 ②期間 ③内容 ④方法	<p>①2023年7月ホーム入居 61歳 女性 配偶者有り 子供無し アルツハイマー型認知症（2022年1月発症）要介護4 生活自立度Ⅳ 徘徊・誤食・失禁有り 会話でのコミュニケーション一部可 自分の意思を言葉で伝えることは不可 <内服>・ドネペジル塩酸塩 OD 錠5mg1錠 朝 ・メマンチン塩酸塩 OD 錠20mg1錠 朝 ・ツムラ（54）抑肝散 2p 分2 <入居後の変化>・リスパダール内服液1mg（不穏時屯用）・リパロ1mg タ（高脂血症）・ルパフィン錠10mg タ（花粉症）※認知症に関する内服に変更なく経過</p> <p>②2023年7月～2024年3月</p> <p>③「若年性認知症は中核症状や BPSD の進行が速い」と言われているが、その方の趣味・思考を通して他者との関わり、生活リズムを整え活動的な生活を送ることでその方らしい生活を送ることが出来、また、その方の価値を上げるものとする</p> <p>④記録にて食事/排泄/入浴/睡眠の変化の確認 ・<認知症高齢者の日常動作意欲 意欲の指標>（Vitality index）を使用し、全スタッフ（25名）から○起床○意思疎通○食事○排せつ○リハビリ、活動の項目についてアンケート実施。リハビリ担当 PT、他関わる職種スタッフから聞き取り・ご入居者様、ご家族様から変化について聞き取り・ご主人様からご入居までとご入居されてからの変化や気持ちについて伺う</p> <p>【倫理的配慮】 研究対象者には、研究の目的、方法、期待される結果、及び研究協力に関する利益と不利益について十分に説明し、自由意思による同意を得ている</p>		
結果	<p>ご主人様より入居前の食事/排せつ/入浴/睡眠について聞き取りを行い、各項目について検討。課題を見つけ、課題解決策を取り入れ現れた変化をまとめた。</p> <p><食事> ご入居前は手づかみで食され、食事中も頻回に立ち上がり、食べこぼしも多い状況。これらに対し、箸を持ちやすいようにお渡しし、ご自宅でお料理を作られていた際に使用していたエプロンをご主人様に依頼しお持ちいただく。これらによってご本人様が「食事」という思考に切り替わり食事中の立ち上がりが激減する。</p>		

<排せつ> ご自宅ではトイレの場所は理解しておられるも、排せつ後の始末がご自身では行えず壁や床を汚されていた。ご入居後は尿意・便意無く、トイレの場所も把握できない為、スタッフが定時誘導を行う。1時間ごとの定時誘導にて排せつのタイミングを掴む。また、それらをスタッフが携帯しているインカムにて共有し記録に残す。これらによりリハビリパンツ・パットの使用量がご入居前に比べ2/3程に減らすことに成功。

<入浴> ご入居前は1回/週通われていたデイサービスでシャワー浴。入浴中に排せつをされてしまったことがあり以降浴槽に入ることはないとのこと。ホームでは入浴前に必ず排せつ誘導。そして、一つ一つの動作に不安を感じられないよう、スタッフが一緒に「手すりを持つ」「ここに右足を置く」等説明を行いながら「怖くない」ということを理解して頂くことで安心してご入浴できるようになり、現在は2回/週、浴槽にてしっかり温まられている。

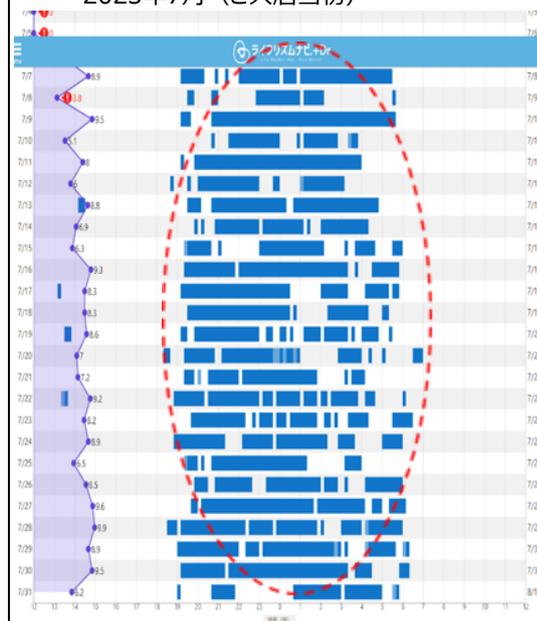
<睡眠> 浅眠で3～4時間の睡眠、覚醒されると大声でご主人様を起こす行為有り。ご入居直後は夜間徘徊や夜勤スタッフの後をついて歩く行為が頻回。そこで、ライフリズムナビ Dr.にて巣民状態、入眠の時間、覚醒の時間、回数、間隔を確認し訪室のタイミングを調整。そして、A様の行動パターン『人のいるところや、明るい方向に向かって行く』を把握し、夜間A様の居室前の談話室の明かりとテレビをつけ、人の気配を演出。A様は、夜間居室から出てこられても談話室のソファにて寛がれておられるようになり、夜勤スタッフの後をついて歩く行為は無くなる。そして、ホームでの生活にも慣れ、リハビリなどで日中の活動量も増えたことから夜間の睡眠時間が長くなる。

※表1 A様の入居前と入居後の変化

	入居前	取り組み	入居後
食事	手づかみ 立ち上がり頻回 食べこぼし多	箸を手渡し ご自宅でのエプロン使用	手づかみ無し 立ち上がり減 食べこぼし減
排せつ	トイレ場所認識有り 失禁有り	定時誘導 インカムにて共有	トイレ場所認識なし 失禁有り
入浴	週1回シャワー浴 入浴中に失禁有り 浴槽への跨ぎ不可	入浴前トイレ誘導 説明、一緒に行い 安全確認	週2回浴槽にて温まられる 浴槽への跨ぎ可 入浴中失禁無し
睡眠	浅眠 3～4時間の睡眠 夜間覚醒有り 不安感から大声・徘徊有り	入眠、覚醒の時間の 把握 談話室の気配演出	ほぼ定時に入眠 睡眠時間が長くなる 夜間覚醒の減少 大声・徘徊ほぼ無し

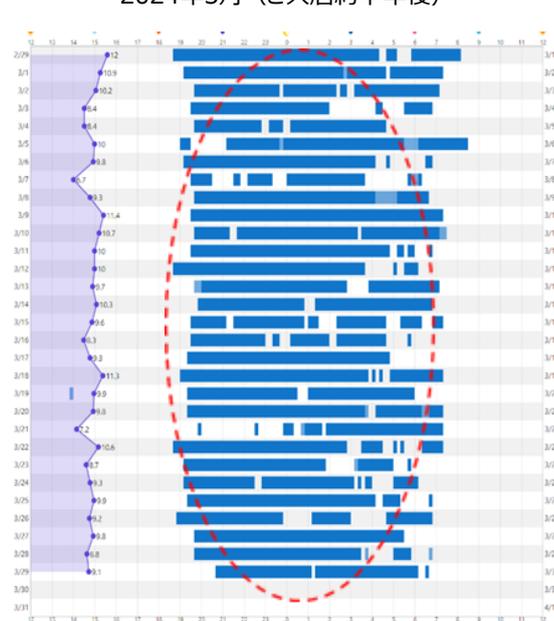
※表2 ライフリズムナビ Dr.による夜間睡眠の様子

2023年7月（ご入居当初）



20時 ←→ 翌6時

2024年3月（ご入居約半年後）



20時 ←→ 翌6時

【個別リハビリ担当 PT より】・屋外への外出の為に車の乗降や階段昇降が円滑にできる・同一姿勢によって生じる首や肩の倦怠感の軽減、下肢筋力と全身耐久性の維持 を目標に60分のリハビリを2回/週実施。リハビリ開始当初は「運動」とお誘いしても拒否があったが、ご本人様のお好きな歌唱を通じ関係性を構築し、声掛けの実では認知機能面から

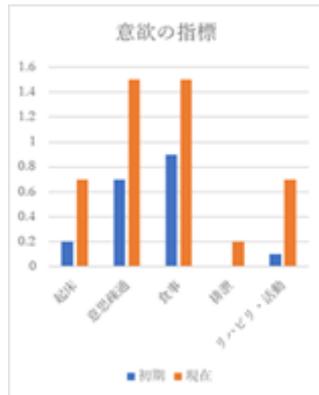
理解が得られない為映像を用いて運動に取り入れた。また、右側の方が認識しやすく筋力も良好の為右からの動きで安心感を得た。結果、運動には拒否が無くなり、毎回意欲的に取り組むことが出来るようになった。・座位時の際の体幹の前傾は継続して見られるが声掛けのみで自己修正可となる。また、4段程の段差であれば片側からの介助のみで昇降可能となる。

【訪問理美容スタッフより】・毎月カット施術しているが、最初は座っていることも難しかったが今では静かに座ってくださっているのとでも施術がスムーズになった。ニコニコと歌を歌っていらっしゃる時もある。【集団リハビリ担当 PT より】・本当に落ち着いた。最初は座っていることが出来ずに、終始歩かれイライラされている様な険しい表情だったが、今は同じ動作をしてくれる時もあり、スタッフさんの声掛けでまた座られるので、スタッフさんとの関係性の良さを感じていた。

【外部清掃会社スタッフ】・A様はもともと外資系企業にお勤めだったため英語がとても上手。私が英語で話しかけると、スムーズに英語でお返事される。覚えておられるのはすごいこと。

【ご入居者様・ご家族様】・とにかく笑顔が増えた。・夜、外を歩かれていたけれど今は全くなかった。・怒っているところを見たことが無いし、いつもニコニコしている。・ホームエントランスにてニコニコと手を振ってくれる。

※表3 意欲の指標



<認知症高齢者の日常動作意欲 意欲の指標>を用いてホーム介護スタッフ25名から聞き取りを実施した結果、意思疎通と食事に大きな変化有り。介護スタッフからは「暴言が減って穏やかに過ごされるようになった」「自ら箸で食事をされるようになった」「ニコニコと笑顔で冗談を言われる」と声上がる。

【ご主人様より】年齢の違う方々と生活を共にすることで本人がどのように過ごすのか心配していたが、自分がホームに行くたびにニコニコと笑顔で過ごしているのを見て良かったと感じている。一方、外に行った時には自分の名前や生年月日が言えない、書けないなど認知症が進行しているとも感じている。奥さんが毎日 Smile で生活してくれていることが僕にとってとても嬉しいこと。

結果に基づく考察

ご入居当初、険しい表情で「触るな！」「うるさい！」と大声で強い言葉を発していたが、他者とのコミュニケーションによってあらゆる面において変化が表れている。「若年性認知症は中核症状 BPSD の進行が速い」と言われていることに対してどれだけ他者との交流や関りを持つことによって進行を遅らせることは可能と思われる。また、A様に関して言えば、歩いている人の後ろをついて行く・明るい賑やかな方向へ進む傾向がある・会話の中で引かかった単語を繰り返して発言するというパターンが見つけられたため、こちらを上手く日常生活やケアに取り入れることで A 様がより他者との関りを持てるようになり、清潔を保持できるようになったことで尊厳が保たれていると思われる。

今後の課題

チャームプレミア目白お留山で若年性認知症の方をお受け入れたことが無かった為、事前に全体会議にて勉強会を実施し各自資料を読み込み、改めて学び直しのうえ、お受け入れを行った。ご入居当初は他のご入居者様からは一部厳しいお声もあったが、A 様の笑顔で過ごされる様子に感化され、今では「A さん！こっちにいらっしやいな」と皆様がお声を掛けてくださっている。また、食事時にはエプロンを使用し食べこぼしを防ぎ、週2回の入浴で清潔も保持できており A 様の尊厳がしっかり守られていることも大きな要因と思われる。ご主人様からは「年齢の違う方々と生活を共にすることで本人がどのように過ごすのか心配していたが、自分がホームに行くたびにニコニコと笑顔で過ごしているのを見て良かったと感じている。一方、受診で外に行った時には段差の認識が出来なかつたり、自分の名前や生年月日が言えない、書けないなど認知症が少しずつ進行しているとも感じている」とお話を伺う。若年性認知症は進行が早く、A 様も要介護 1 から1年半後には要介護4へと移行しており、半年後・一年後の変化を見越してのケアの介入が必要である。チャームケアの理念でもある『お一人おひとりの価値観を大切に、お客様にあった魅力的な生活を提案』すべく、A 様にとっての魅力的な生活とは何か？また、今日の魅力的な生活と来週・来月の魅力的な生活は違うであろうことを念頭に、A 様が Smile でいてくださるよう向き合っていく。そして、「若年性認知症に対して理解してくれば」と、たくさんのお話をして下さったご主人様、関係各位にも感謝を申し上げ今後のケアに繋いでいく。

引用文献
参考文献

①意欲の指標 ②認知症ハンドブック ③認知症介護情報ネットワーク

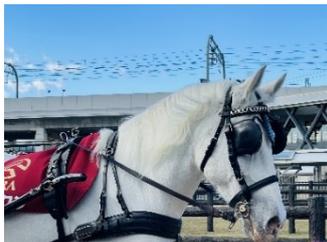
介護付きホーム研究サミット2024 第12回事例研究発表全国大会

優秀賞受賞者 研究発表概要

NO.6

法人名	株式会社さわやか倶楽部		
施設名	さわやか枚方館		
発表者名	渡辺 由依奈	役職	生活相談員
研究タイトル	思い出の場所へ家族ともう一度 ～エンドオブライフ 施設職員ができること～		
ホーム所在地	〒573-1153 大阪府枚方市招提大谷2-21-7		
開設	2012年 12月 1日	定員	108名
平均介護度	2.61	職員比率	2.9 : 1
取組の目的	<ol style="list-style-type: none"> 1. エンドオブライフケアについて理解し、意思決定支援が施設職員全体で実施できるよう取り組む 2. ライフマップを活用することで、今までの生活、これから望むことなど想いを傾聴し、入居者様の願いを叶えるために、施設職員ができることは何かを把握し、実行できるように支援する事が出来る 3. 統一したケア・個別性のある看取り介護が出来るツールを作成し取り組み、浸透させることができる 		
取組の背景	<p>全国老人福祉施設が発表した「看取り介護指針・説明支援ツール」¹⁾では「看取りとは近い将来、死が避けられないとした人に対し、人生の最後まで尊厳ある生活を支援する」とされている。エンドオブライフケアにおいて、「エンド」は「おわり」、「ライフ」は「いのち」を意味する。エンドオブライフケアは誰しもがいつかは経験する命のおわりについて考える人が彼または彼女らしく生きられるように支援するケアのこと。看取りにおいて、入居者様が希望していることを施設職員が出来ていたのか、もう少し関わることができていたのではないかという考えや、意見が聞けたことから、具体的問題点などを抽出し枚方館における看取り対応の見直しを実施していくことにした。</p> <p>そこで、今回エンドオブライフケアに着目し、さわやか倶楽部で作成したライフマップをケアマネにより実施。本人、家族の意向をもとに、希望が叶えられるようにと全ての職員が関わっていくことができた事例を通し、個別性のある看取りを介護経験関係なく、統一したケアが実践できるように作成したツールを活用した実際を報告する。</p>		
取組方法 ①対象 ②期間 ③内容 ④方法	<ol style="list-style-type: none"> ① 対象：さわやか枚方館 施設職員 42名 ② 期間：2023年10月12日～現在 ③ 内容：1) 看取り対応の入居者様が「家族とともに思い出の場所へ、未来への約束を実行できた」事例報告 2) Life カードの取り組みの実際 ④ 方法：1) Life カード作成においての基本項目は、施設職員へヒアリングを実施 2) 基本項目は単純集計を用い言語を抽出 3) Life カードの使用法としては、カンファレンスにて言語を抽出し、行動把握できるようにした <p>倫理的配慮：ヒアリング対象者には研究者が研究目的と個人が特定されないこと、回答によって業務上不利益が生じないことを口頭で説明し返答をもって承諾を得た</p>		
結果	<p>1) 事例報告</p> <p>誤嚥性肺炎で病院に入院され点滴治療を受けていた A 様。回復の見込みがないと医師からご家族様が説明を受けられた。病院の面会時間は制限があり、ご家族様は A 様とともに残された時間を過ごしたいと考え、姉がいる枚方館に看取りの方向で入居となった。入居時に余命わずかと医師より説明があったが、A 様は自分で意思表示をしていたことから残された時間を有意義に過ごして頂きたいと考え、どのように過ごしていきたいのかを確認するためにケアマネよりライフマップを実施した。ライフマップの中のポイントとして、競馬場への外出。この話を思い出しているとき A 様・ご家族様も「もう一度行きたいね。」とお互い顔を見合わせ笑顔がみられた。そこで、競馬場への外出に焦点を置き、対応できるように職員間でカンファレンスを実施し、「未来への目標」を実行できるよう支援していくことにした。</p> <p>具体的内容：1. ケアマネによる支援計画立案 2. 介護士による体力維持 3. 看護師による体調管理・異常の早期発見。しかし、突然の発熱、呼吸状態悪化で救急搬送され入院となった。暫く入院されていたが、必要な治療はないとの判断で帰館されることになった。「未来への目標・約束」はできないと考えていたが、A 様・ご家族様から「家族旅行の件はまだ諦めていないです。ちょっとでも外出して思い出作りできませんか。」と話があった。この状態で外出できるのか、</p>		

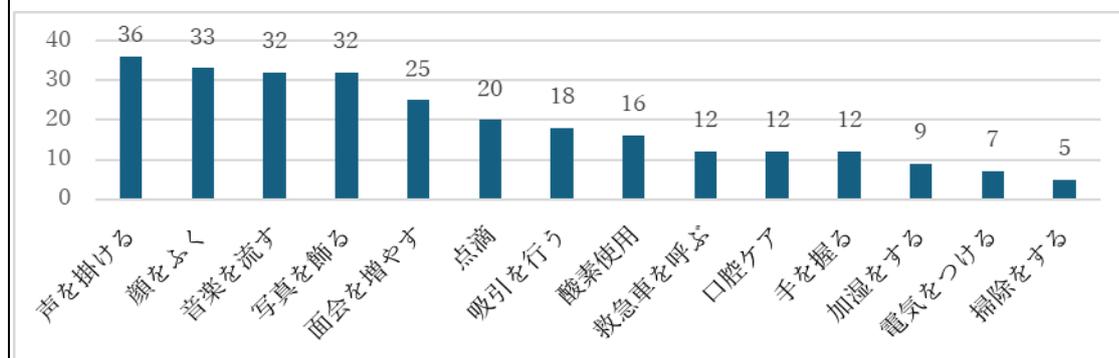
行動に移して良いのかと葛藤し、カンファレンスを行った結果、できることはしてあげたい、未来への約束を叶えさせてあげたいと考え、行動に移すことにした。競馬場への外出目的としては、1. 家族との思い出を作る 2. 安心して楽しめる環境作り 3. 安全に思い出の場所に行くことができる。外出についての準備として、往診医への確認。状態変化があれば受け入れ依頼ができる状態の確保。ご家族様には急変のリスクを説明し実行するのか再確認したところ「これが最後になるかも。思い出を作りに行きたい。」と気持ちが揺らぐことはなかった。そして、2023年12月2日 競馬場へ出発。



2) Lifeカード

看取りにおいて職員は様々な意見を持っている。関わる中で入居者様やご家族様の希望が叶えられたのか、また、もう少し〇〇してあげたら良かったのではないかと、私だったらこうするという意見がある。職員にヒアリングを行い抽出した言語をカードとして作成することで、介護経験に関わらず統一したケアが実施できるのではないかと考えた。

カードの基本項目



(1) Lifeカードの目的

看取り期に本人様、ご家族様の望みに寄り添い、対応する職員が統一したケアを実現するもの。より良いケアの提案実現とケアの内容をカードによって見える化することで業務の明確化・効率化を行い、寄り添ったケアを行える。

(2) 行動手順(事例)

① ライフマップの中で必要とするワードをピックアップ (入居時)



☆本人様の好きだったことやご家族様の入居時の希望☆

PICK UP!

- 音楽鑑賞 (美空ひばり)
- 映画鑑賞 (貞子)
- 家族写真

② 看取りに関して必要時期にカンファレンスを実施 → ワードを選択

☆職員の意見・希望・介護方法など(職員目線)☆



PICK UP!

- 希望を叶えたい
- 食事・水分無理強いしない
- 覚醒時エンシュアの提供

③ ご家族様聞き取り実施 → ワードを選択(家族の希望)

☆看取り期：ご家族様の意向・職員の見解など☆



④ 選択した Life カードを貼付したボードを居室に配置

これらのカードと共にバイタルサインや体位変換などの基本項目・時間を考慮した内容を、ケアに携わる職員全員が把握し、統一したケアの実践が出来るよう「見える化」を実施している。



1. 左側に項目・時間
(カンファレンスにて決定)
2. 実施した時間にポイントを置く
3. 右側には抽出した言語・個性のあるケアの内容

結果に基づく考察

1. 質の高いエンドオブライフケアの実践のコアは6つの構成要素とされている。症状マネジメント・意思決定支援・治療の選択・家族ケア・人生の QOL を焦点化・人間の尊重、これらの構成要素がチームアプローチ、組織アプローチを用いて機能的に連動することによってなされるケアとされている。A 様の場合症状マネジメントでは、Spo2が90代前半で酸素をしており喀痰困難時には吸引を実施。呼吸状態など看護師に観察してもらい、呼吸困難など無いように異常の早期発見が出来るように支援、介入してもらっていた。意思決定支援、家族ケアにおいてはライフマップを実施できたことにより A 様・ご家族様の望むことや、残された時間で今後の目標とするものが分かり実施できるように支援、介入していくことが出来たと考える。家族ケアにおいては、特に残された人にとっての思い出が再構築されたのではないかと考えられた。施設職員が実施した事として、ケアマネは支援計画立案、相談員はマネジメント、看護師は体調管理、介護士は外出できるように日常生活の援助に取り組み思い出の場所に外出・旅行が出来るという1つの目標を目指し、支援していくことができた。今後も看取り=死にゆくとだけ考えるのではなく、入居者様が本当に望んでいることや、私達職員がその人の為に尊厳のある死を迎えるにあたってできることは何かを考え行動していく必要性を学ぶことができた。今回、ライフマップを実施することで、その人の人生の大事にしてきた気持ちや思いに寄り添う事だけではなく、ご家族様との思い出も振り返ることができた。競馬場に行くという未来への約束も実行でき、今後の目標にもつながる大切なツールであったと再認識できた。今後はエンドオブライフケアについて施設職員すべてが対応できるようなツールを作成していきたいと考え、作成したのが Life カード。

2. Life カードにおいては、初めて看取りを経験した職員の想い・行動、先輩職員とペアを組むことで得る安心感、看取り場面での精神的負担の軽減など共に振り返ることが重要であり、緩和ケア(病院)が最後の選択肢ではなく、施設でもできることはあると考えられる。看取りを行う際に、最も尊重することとして「本人の意思」が何より大切であり、主役は「入居者様」であり本人の想いを専門職で繋いでいくことが大切。そして、命の期限を延ばせなくても、残りの人生に生きる力を吹き込むことができる。カードを作成することにより、本人様・ご家族様・職員が統一したケアの実現ができ、より良いケアの提案・実現とケアの内容が見える化することにより業務の明確化・効率化を行い、空白のカードにカンファレンスで実施した言語を抽出し記載することで、個性のある看取りケアが実現できると考える。

今後の課題

1. エンドオブライフへの取り組みについての必要性を施設職員が理解し、浸透していきけるようにする
2. Life カードの活用方法
入居時のライフマップと同様に必要項目を抽出し、個性のある介護ケアに繋げていくために継続使用すること、また、看取りだけではなく様々な場面で活用できるように改善していく

引用文献
参考文献

引用文献：全国老人福祉施設協議会(2014).看取り介護指針・説明支援ツール p.4
参考文献：島田千穂(東京都健康長寿医療センター研究所.2016).看取り振り返りを有効に実施するためのガイド 佐々涼子(2020).エンド・オブ・ライフ 集英社

介護付きホーム研究サミット2024 第12回事例研究発表全国大会

優秀賞受賞者 研究発表概要

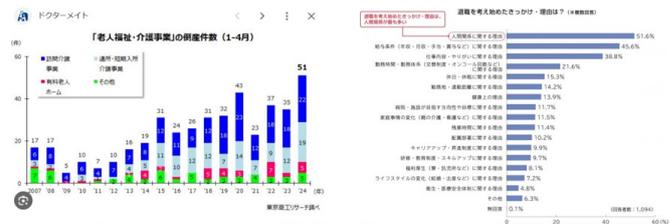
NO. 7

法人名	社会福祉法人緑山会																
施設名	悠久の里																
発表者名	馬場 美香子	役職	介護福祉士														
研究タイトル	出逢いに感謝！ ～グローバルな人材育成と定着～																
ホーム所在地	〒745-0303 山口県周南市大字鹿野中10046番地の1																
開設	2006年 4月	定員	60名														
平均介護度	3.05	職員比率	2.4 : 1														
研究の目的	外国人職員が働きやすい職場環境、住みやすい生活環境を作り、人材定着を目指す																
研究の背景	<p>コンビニまで車で20分、最寄り駅まで車で30分、車通勤が必須の地域に悠久の里はある。身近な公共交通機関はバスだが、バスの本数も少ない。冬季は積雪や凍結があり、運転に難色を示されることが多い。市街地から離れた場所はそれだけで働きにくいとイメージし敬遠されてしまう。</p> <p>令和4年以降は特に人材確保に苦慮し、常に人員配置基準を意識した運営状態であった。そのような状況を打破するために、外国人労働者の力を借りることにした。</p> <p>職員の平均年齢も高く、今後継続的に人員確保の必要があることから、外国人労働者にとって働きやすい職場環境と住みやすい生活環境を整えることにした。</p>																
研究方法 ①対象 ②期間 ③内容 ④方法	<p>①対象</p> <table border="1"> <tr> <td rowspan="2">技能実習</td> <td>20代女性</td> <td rowspan="4">インドネシア</td> <td>R5.2～</td> </tr> <tr> <td>20代女性</td> <td>R5.2～</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">特定技能</td> <td>20代男性</td> <td>R5.5～</td> </tr> <tr> <td>20代男性</td> <td>R5.5～</td> </tr> <tr> <td>介護職員</td> <td colspan="2">23名（内技能実習指導員3名）</td> </tr> </table> <p>②期間 令和5年2月～現在</p> <p>③④内容・方法</p> <p>(1) 外国人労働者を受け入れるための心構えや制度、又他国の文化を知る</p> <p>(2) 職場環境を整える</p> <ol style="list-style-type: none"> 業務の見直し 教育担当職員2名配置（介護技術、コミュニケーション力、業務の指導、悩み相談） 入職1ヶ月でユニット担当（10:1）ができるようサポートする <p>(3) 生活環境を整える</p> <ol style="list-style-type: none"> 地域マップを作成し、鹿野地域を知ってもらう（銀行や郵便局、スーパー、バス停等） 食生活の違いに配慮し、唐辛子等の野菜を敷地内で栽培し、食料を提供する 地域イベント情報の発信 			技能実習	20代女性	インドネシア	R5.2～	20代女性	R5.2～	特定技能	20代男性	R5.5～	20代男性	R5.5～	介護職員	23名（内技能実習指導員3名）	
技能実習	20代女性	インドネシア	R5.2～														
	20代女性		R5.2～														
特定技能	20代男性		R5.5～														
	20代男性		R5.5～														
介護職員	23名（内技能実習指導員3名）																

	<p>(4) 定期面談とストレスチェックの実施</p> <p>1) 教育担当者と面談を1回/月実施（現在の状況を把握しステップアップ目標を明確にする）</p> <p>2) ストレスチェック（令和5年10月、令和6年4月に全職員実施）</p> <p>(5) 満足度調査の実施</p> <p>1) 外国人職員4名 …… 職場面、生活面、その他項目別にアンケート調査実施</p> <p>2) 職員23名 …… 外国人職員についてのアンケート調査実施</p>
--	---

結果	<p>(1) <u>外国人労働者を受け入れるための心構えや制度、文化を知る</u></p> <p>受け入れ開始時に勉強会を開催したことで、職場環境だけでなく、生活環境を整えることも受入企業の役割であることが周知できた。</p> <p>(2) <u>職場環境を整える</u></p> <p>業務改善アンケートの実施 1回目 令和5年4月中旬アンケート実施 →6月1日より業務内容変更 2回目 令和5年6月中旬見直しアンケート実施 →7月1日より業務内容変更</p> <p>早出の業務量が多く、勤務時間より早く出勤する前残業が定着していた為、他勤務への業務の振り分けを行った。</p> <p>(3) <u>生活環境を整える</u></p> <p>・畑の野菜は自由に収穫してもらい、食材として提供した。唐辛子類はスーパーでは手に入れることができない為、喜ばれた。母国の料理に近い物が作れることで、変わらない食生活を送ることができたと考える。</p> <p>・地域イベントでは、盆踊りやマルシェ、花火大会等のお祭りや、スポーツ大会に参加し、地域交流だけでなく、他企業で働く外国人と知り合うきっかけになり、友達作りに役立った。</p> <p>(4) <u>定期面談とストレスチェックの実施</u></p> <p>・教育担当職員は各階1名配置した。業務内容や入居者の状況を把握し理解している職員が担当することで、気軽に相談できるよう配慮した。面談とは言わず、気軽にコミュニケーションをとり、その中で悩みや不安を感じていることを聞き出すようにした。</p> <p>・ストレスチェック（29項目4段階評価）の結果、全職員のストレスチェックと比較し、外国人職員のストレス度は低いことがわかった。</p> <p>(5) 満足度調査結果 令和6年10月実施</p> <p>1) 職員23名 外国人職員を迎えて良かったか : 良かった91% わからない9%</p> <p>2) 外国人職員4名</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 15%; text-align: center;">職場</td> <td style="width: 15%; text-align: center;">満足度82%</td> <td style="width: 15%;">満足</td> <td style="width: 55%;"> <ul style="list-style-type: none"> ・休憩がしっかりとれる ・仕事の相談ができる人がいる ・勤務時間通りに出勤、退勤できている ・人間関係や雰囲気が良い ・自己成長していると感じる ・仕事内容 </td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>不満足</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションが上手くとれない ・憂鬱な気持ちや孤独を感じることもある </td> </tr> </table>	職場	満足度82%	満足	<ul style="list-style-type: none"> ・休憩がしっかりとれる ・仕事の相談ができる人がいる ・勤務時間通りに出勤、退勤できている ・人間関係や雰囲気が良い ・自己成長していると感じる ・仕事内容 			不満足	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションが上手くとれない ・憂鬱な気持ちや孤独を感じることもある
職場	満足度82%	満足	<ul style="list-style-type: none"> ・休憩がしっかりとれる ・仕事の相談ができる人がいる ・勤務時間通りに出勤、退勤できている ・人間関係や雰囲気が良い ・自己成長していると感じる ・仕事内容 						
		不満足	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションが上手くとれない ・憂鬱な気持ちや孤独を感じることもある 						

	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="416 174 512 945">生活</td> <td data-bbox="512 174 683 945">満足度80%</td> <td data-bbox="683 174 1442 497"> <p>満足</p> <ul style="list-style-type: none"> ・宿舎に関すること ・食料の確保 ・地域イベントが多く、参加できる ・休日は趣味（釣りや散歩）ができる ・母国にいる家族と密に連絡がとれ安心できる ・教会やお祈りの時間を大切にできている </td> </tr> <tr> <td data-bbox="416 497 512 752"></td> <td data-bbox="512 497 683 752"></td> <td data-bbox="683 497 1442 752"> <p>不満足</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生活のルール（ゴミ出し）に不安がある ・体調不良の時どうしたら良いかわからない ・公共交通機関の利用に不安がある ・交通の便が悪い </td> </tr> <tr> <td data-bbox="416 752 512 945">その他</td> <td data-bbox="512 752 683 945"></td> <td data-bbox="683 752 1442 945"> <ul style="list-style-type: none"> ・とても良い職場なので知人や友人に紹介したい ・今の楽しみは仕事 ・休日に旅行することが楽しみ </td> </tr> </table>	生活	満足度80%	<p>満足</p> <ul style="list-style-type: none"> ・宿舎に関すること ・食料の確保 ・地域イベントが多く、参加できる ・休日は趣味（釣りや散歩）ができる ・母国にいる家族と密に連絡がとれ安心できる ・教会やお祈りの時間を大切にできている 			<p>不満足</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生活のルール（ゴミ出し）に不安がある ・体調不良の時どうしたら良いかわからない ・公共交通機関の利用に不安がある ・交通の便が悪い 	その他		<ul style="list-style-type: none"> ・とても良い職場なので知人や友人に紹介したい ・今の楽しみは仕事 ・休日に旅行することが楽しみ
生活	満足度80%	<p>満足</p> <ul style="list-style-type: none"> ・宿舎に関すること ・食料の確保 ・地域イベントが多く、参加できる ・休日は趣味（釣りや散歩）ができる ・母国にいる家族と密に連絡がとれ安心できる ・教会やお祈りの時間を大切にできている 								
		<p>不満足</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生活のルール（ゴミ出し）に不安がある ・体調不良の時どうしたら良いかわからない ・公共交通機関の利用に不安がある ・交通の便が悪い 								
その他		<ul style="list-style-type: none"> ・とても良い職場なので知人や友人に紹介したい ・今の楽しみは仕事 ・休日に旅行することが楽しみ 								
結果に基づく考察	<p>職場環境、生活環境ともに満足度を80%超えていた。</p> <p>職場環境では、業務改善により残業なしが定着したことで、勤務時間通りに出勤、退勤ができる、休憩がとれることが満足度の向上に繋がった。生活環境においては、イベントへの参加により、友人作りや地域でのスポーツクラブへの継続的な参加へのきっかけになり、職場以外の居場所作りに役立った。</p> <p>外国人職員が同時期に4名入職することに対し、人員が増える安心感とともに漠然とした不安を抱えている職員も多かった。技能実習生や特定技能を迎え入れ、仕事に真摯に向き合う姿や学ぶ姿勢は職員の手本となり、大きな刺激を与えてくれた。また、「教える」という行為は、自分自身の理解力や技術力、接遇マナーの振り返りに大いに役立ち、自己成長することができた。更に4名の出身国が同じであるため、先に入国した2名が日本語の先輩となり、通訳としての役割を果たしてくれていることで、後に入国した2名にとって不安や戸惑いを軽減することができたとも考えている。</p> <p>職場の雰囲気明るく、盛り上げてくれる存在であり、即戦力となり活躍している4名には感謝している。出逢えて良かった、心からそう思っている。</p>									
今後の課題	<p>外国人職員のステップアップはモチベーションが向上するだけでなく、満足度の向上に繋がっていく。理解しやすい指導マニュアルの作成、計画的な介護福祉士や日本語能力試験等資格取得のバックアップが大切である。</p> <p>居心地の良し悪しは、外国人コミュニティや SNS 等であつという間に広がっていく。今後の外国人人材獲得のためにも、居心地の良い環境作りは大切である。</p> <p>日本人職員にとっても、外国人職員にとっても居心地の良い、より明るく開かれたホームを目指していく。</p>									
引用文献 参考文献										

法人名	株式会社アライブメディア		
施設名	NOZOMI LAB		
発表者名	藤田 祐子	役職	課長
研究タイトル	介護業界こそ、Well-being を！ ～明日からできる、幸福度 UP チャレンジ！～		
ホーム所在地	〒150-0001 東京都渋谷区神宮前6-19-20 プレファス神宮前		
開設	2022年 10月	定員	
研究の目的	アライブメディアが実行した「ウェルビーイング経営」を介護付きホームの経営や運営に活かせる形で OUTPUT し、業界全体のウェルビーイングを目指す。		
研究の背景	<p>介護付きホームの今</p> <p>熾烈な生き残り競争／人員不足／人間関係摩擦／離職メンタルトラブル／カスタマーハラスメント…</p> <p>介護付きホームの職員は果たして幸せ（ウェルビーイング）なのだろうか…</p> <p>むしろマイナスのイメージが世間に定着している現状ではないか？</p>  <p>アライブメディアの今</p> <p>ウェルビーイング経営を本気で実行…（参考文献「ビジョナリーカンパニー 2」「幸せのメカニズム」等多数…）</p> <p>日々現場で、次々と生み出されている事例／苦しい時代から浮上した経営状況</p> <p>続々と人が集まってきている現状</p> <p>このギャップはなぜ生まれているのか？…</p> 		
研究方法	<p>1対象：株式会社アライブメディアの全ホーム</p> <p>2期間：2022年～2023年</p> <p>3内容：日本の幸福学の第一人者である 慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科／ 武蔵野大学ウェルビーイング学部の前野隆司教授 （現在アライブメディア顧問）の 「幸福の4因子」を本社メンバーや運営幹部が学び、実行する。 * 幸福の4因子 https://www.youtube.com/watch?v=5Uo5_-kq4j0</p>   		

4方法： 1…アライブカルチャーの醸造（PDCAのPlan）

会社の理念を Breakdown して、明確にカルチャーを定義する。
カルチャーデッキで、定義したものをわかりやすく浸透していく。
幸福の4因子を人事評価制度に組み込む。
(幸せに気付ける力のあるスタッフが評価される仕組みへ。)



2：研修・会議をウェルビーイングに行う（PDCAのDo）

- ◆経営者との対話 …月に1回、直接社長との対話ができるリアル会議
- ◆1on1 …行動指針を深める対話中心のミーティング
- ◆CBT マネジメント …ストレスで固まって狭くなってしまった考えや行動を、ご自身の力で柔らかくときほぐす（参考：認知行動療法）
- ◆感動ストーリー共有研修…感動ストーリーを共有しウェルビーイングを高める語り手の幸福感が高まる研修
- ◆行動指針を深める研修 …月/1回の WEB 研修
アライブカルチャーとして大切にされている情愛や意志などについて学ぶ全社員研修

3：コミュニケーションツールの導入（PDCAのDo）

「Talknote」を導入し社内 SNS として全社員にアカウント付与。
好事例の共有／学びの OUTPUT。
「いいね」「スタンプ」「コメント」により、投稿数や事例の創出が加速。



4：組織診断（PDCAのCheck）

対スタッフ／対顧客にそれぞれ実行し、組織の特徴を見える化

5：自主性と積極性の発露（PDCAのAction）

- ◆ウェルビーイングアロマ
立場、組織、年齢、性別の壁を越えて、みなで調査。
完成したオリジナルアロマを各ホームで使用。
- ◆ヘラルポニーアートの導入（ホーム×アート）
知的障がいのある作家さんの作品を各ホームスタッフが選んで、活用。



結果

●経営

低迷期を脱出し、3年連続増収増益へ。出た利益は…
→スタッフへ**特別賞与**として還元。→**学びへの投資**（教育環境を整備）
基本ケアプロジェクト／認知症ケアプロジェクト／生産性向上プロジェクトを実行中
→**システム／機材／DX・AI などへの投資**

●離職者数の変化

退職者の数が大きく減少！

●止まらない好事例の創出

ホンダジェット／特急あずさ／ドクター同行旅行…次は飛行機で出雲大社／飛行機で沖縄…
アライブのミッションに、みながコミットをはじめた今、
「真の望み」を叶えるために、もっと深く、もっと広く、ブレークスルーを目指す。



	<p>学びへの投資が現場を動かしはじめており、基本ケアプロジェクト／認知症ケアプロジェクト／生産性向上プロジェクトを実行中。現場のスタッフの学びへの姿勢が大きく変化、自分の立ち位置を知り、「謙虚さ」が生まれ、また、会社の理念と自分の志のマッチングにより、「不屈の精神」が育まれている。</p> <p>(ビジョナリーカンパニー 2…個人としての「謙虚さ」と職業人としての意思の強さ(「不屈の精神」)という組み合わせが第五水準のリーダーシップ)</p> <p>●ウェルビーイングアワード …全職員の幸福度診断で一般平均(利用者数10万人)を超える結果に</p> <p>2024年3月13日 ウェルビーイングアワード ファイナリスト獲得 朝日新聞杯</p>
<p>結果に基づく考察</p>	<p>幸福学を土台にした「ウェルビーイング経営」</p> <p>5つのフェーズで実施されたことにより、スタッフのウェルビーイングが高まった。スタッフの心の向きが定まり、ウェルビーイングになったことで、経営にもご入居者にも社員にも地域にもよい影響があった。ウェルビーイング経営は今、介護事業者が取り組むべき経営手法である。</p> <p>結語… 「スタッフが幸せでなければ、ご入居者を幸せにすることはできない」</p> <p>「ウェルビーイング経営」は経営を安定させ、離職を減らし、現場で素晴らしい事例を量産する。」</p>
<p>今後の課題</p>	<p>PDCAのサイクルが一周し、低迷期からのリバイバルフェーズが終了。二度と慢心せず、ビジョナリーカンパニー 2に示された「第五水準のリーダーシップ」を持つ人材の育成のため、もう一度、企業理念である</p> <p>Vision 認知症を熟知し、思いをカタチにし、日本の介護を牽引しつづける。 Mission 情愛と意志で、ご本人とご家族の「真の望み」を叶える。 Value 「人を大切にできる気持ち」をベースに、お一人おひとりと向き合いつづける。</p> <p>そして、行動指針である5 Value</p> <p>1 Think Civility 2 Think Narrative 3 Do DAIZEN 4 Do Creation Agile 5 GRIT with PASSION</p> <p>に立ち返り、更なる飛躍の planning をして、現状に満足せず、常に突破、打開していく必要がある。</p>  
<p>引用文献 参考文献</p>	<p>『ビジョナリー・カンパニー 2 - 飛躍の法則』</p> <p>著者 : ジム・コリンズ 出版社 : 日経 BP (2001/12/18) 発売日 : 2001/12/18</p> <p>『幸せのメカニズム 実践・幸福学入門』</p> <p>著者 : 前野隆司 出版社 : 講談社 (2013/12/20) 発売日 : 2013/12/20</p>

介護付きホーム研究サミット2024 第12回事例研究発表全国大会

優秀賞受賞者 研究発表概要

NO.9

法人名	株式会社ツクイ		
施設名	ツクイ・サンシャイン西馬込		
発表者名	伊澤 直明	役職	施設長
研究タイトル	ポッチャから始まった地域への参加／老人ホームを地域の資源として生かす為のロードマップ		
ホーム所在地	〒143-0026 東京都大田区西馬込2-28-6		
開設	2019年 3月 1日	定員	67名
平均介護度	2.48	職員比率	2.5 : 1
研究の目的	開設から5年間、コロナの影響で地域との交流なく過ぎ去った時間を取り戻し、5年の間に培ったホームの資源を、地域共生社会の活動拠点として、活用し、地域貢献できるホームを目指す。		
研究の背景	ツクイ・サンシャイン西馬込は、開設1年足らずでコロナ過の感染症対策として、施設と外部との交流が途絶され、地域に開かれたホームづくりを目指していた我々にとって痛恨の約4年間を過ごすこととなりました。その間ホーム内を小さな地域ととらえ、ホーム内で社会性を保った生活が維持できるよう取り組みを続け、ホーム内活動も熟成されてきた中、コロナも5類に移行し、世間一般の中では、社会生活を止めてまで警戒する感染症ではなくなった現在、ツクイ・サンシャイン西馬込は地域交流へ取り組みを始めることを決定。改めて地域で何を求めているか調査し、地域共生社会の資源として活躍するために活動した。		
研究方法	<p>① 調査対象・取組対象 : 大田区包括支援センター ・ 近隣住民 ・ 民生委員</p> <p>② 取組期間 : 2023年8月～現在</p> <p>③ 内容</p> <p>① 我々が現段階で提供できる機能とは何か</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ツクイ・サンシャイン西馬込を勉強会、認知症サポーター研修等、地域の集会場所としての提供 ・CM・SW・PT・OT・NS等の専門職が配置されている為、地域の駆け込み寺的相談場所として一時的相談受付を行い、包括支援センター等行政に繋げる橋渡しとしての役割提案 ・フードバンク等各種ボランティア活動の活動拠点として <p>② 地域に新たに参加するために何をしたらよいか、調査</p> <p>②-1 地域のニーズを調査</p> <p>地域のニーズと地域課題を調査する為、担当地区の包括支援センターに ツクイ・サンシャイン西馬込として提供できる資源 ① を提案すると共に、地域の課題と求めている資源がないか相談に伺った。</p> <p>②-2 地域で望まれていた事 (大田区西馬込の場合)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・集会所・イベント会場としての利用 <p>西馬込エリアは包括支援センター馬込と包括支援センター南馬込の丁度中間に位置し、福祉の谷間に位置している。立地も高台にあり、現状の集会所では高齢者は参加しにくい為、ホームを利用させてもらえると今まで参加できなかった高齢者の参加も可能になる。</p> <p>大田区の推進事業として、見守りキーホルダーというものがあり、その登録会の会場としての活用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・総合事業の介護予防会場としての場所提供や専門職の力を借りたい。 <p>包括支援センターも人材には困っている様子。専門的な相談、実施できる人材が足りず、やりたいことがあっても実施が難しい状況にある。活動拠点と共に実行してくれる専門職 (例えば地域の体操教室や認知症サポーター研修・体力測定会等) に人と場所で協力してもらいたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域活性化の試みを一緒に企画していけたら楽しそうですね。 <p>英語教室やカラーコーディネートなどのカルチャースクールの開催等一緒に企画していく。</p>		

②-3 地域活動に参加するために出来ることを行った。

各イベント等は年間計画ですでに決められている為、場所の提供等は来期の計画で検討。
大田区では馬込エリアの子供から高齢者までポッチャが流行っている為。交流試合などできる機会があるかもしれないとアドバイスを受ける。
機材と講師は社会福祉協議会が貸してくれるのでとの提案を受け、まずはポッチャからチャレンジしてみることにした。

④ 方法

上記③の内容から西馬込では以下の方法でアプローチを開始。地域とのつながりを広げていきました。

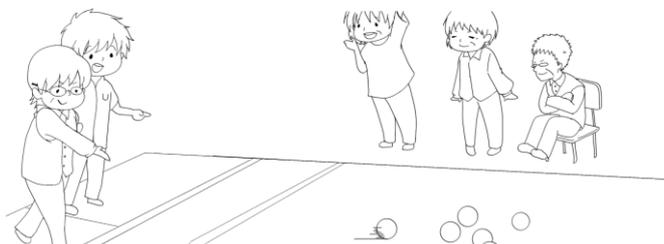
① ポッチャの機材を借り、講師を招き、活動として取り入れていきました。

①-1 大田区の社会福祉協議会よりポッチャの道具レンタルとポッチャ協会の講師を紹介していただく。

2023年10月ポッチャのルールも楽しみ方も知らない為、大田区ポッチャ協会の方々をお招きし、基本的なルールと遊び方を教示いただく。参加されたお客様、職員共に盛り上がり、楽しい時間を過ごすことが出来る。

①-2 大田区スポーツ大会 ポッチャの部への参加

ポッチャ協会の担当者よりポッチャの大田区大会があることを聞いた。老人ホームとして参加しているチームは今までなく、参加することに意義があるということで、参加を決意。
ポッチャの道具とコートを購入し、練習を始めることにした。



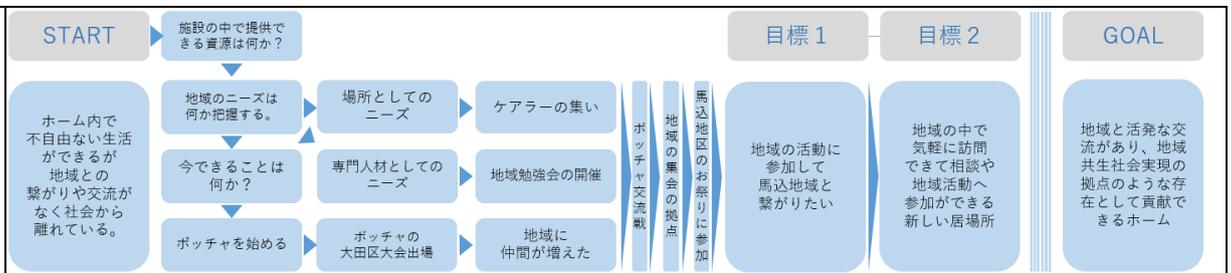
①-3 ポッチャ部始動

ポッチャというスポーツは高齢者にはなじみがなく、どんなスポーツであるかを認識してもらうところからが始まりであった。繰り返しルールを説明し大まかなルールの把握をしていただいてチームに分かれて競う方法に加えて、とにかくボールを投げて体で動きを覚えていただく練習を実施していた。練習を重ねるごとにお客様にポッチャというスポーツの認識が定着し、お客様から練習はやらないのかとの希望が聞かれるようになった。同じ時期に大田区スポーツ大会への参加のお誘いを受けた。地域の方々にくいつんでも楽しんで活躍できることを知っていただきたく、当施設最高齢の100歳以上のメンバーを選抜し出場することにした。大会に参加するにあたりご家族様には事前に連絡し、大会当日はたくさんのご家族様が応援に来ていた。出場メンバーが100歳を超えている方々であり体調管理が必須であったが当日は全員健康を維持した状態で参加することができた。大会では出場している中で最年少の小学生と最高齢の当施設のお客様が対戦するという場面が生まれ、注目を集めた。試合中は立位でボールを投げる方、車椅子のままボールを投げる方それぞれに合わせて機能訓練士が転倒予防に努めた。ご家族様の応援のもと奮闘したが、試合では惜敗してしまった。しかしお客様やご家族様をはじめ、会場にいた人々には笑顔が見られ、大会は怪我もなく無事に終えることができた。その後、地域包括支援センターの方から連絡があり、地域の方々との交流試合をすることとなった。交流試合ではスポーツ大会の経験者の他、施設の中でもポッチャを広める目的で新たに90代の方に参加していただいた。地域の方々には70～90代の方が多く、手慣れた様子でポッチャを楽しんでいた。同じチームとなった地域の方は施設のお客様に「頑張りましょう！！」と掛け声をかけて盛り上げてくださっていた。また、「あの辺に投げるといいよ」等の戦略のアドバイスをいただきながら施設のお客様もそれに応えるように参加されていた。交流試合終了後、地域の参加者の1人が「母が同じくらいなんです。元気をもらいました。またお願いします。」と涙ながらに話され、お客様は「楽しい時間をありがとう。またお願いします」とお返事されていました。

帰りの車中では初めて交流試合に参加されたお客様から「95歳のおばあちゃんがはしゃいじやったわ」との感想をいただき、2度目の地域活動を終えることができた。

結果

今回の取り組みで出来上がった地域への参加までをロードマップにまとめるとは次のページようになる。



① ポッチャ大会に参加することの意義

大田区民スポーツ大会・ポッチャ部門へ100歳のチームで参加することによって、話題となり、地域に顔見知りが増えた。ポッチャは地域に飛び込む際コミュニケーションをとるための良いツールとなっただけではなく、ご入居されているお客様の意欲と活動根拠に変化が見られた。参加されたお客様から、「うまく投げられたかな？みんなが応援してくれると嬉しい」と楽しそうにお話される様子や、ご家族様からも、「もっと参加させてあげてください。ポッチャに行ってきたから随分と活気が戻っているように思います。」などの感想もありました。人と関わることで、脳と心に刺激を受け、意欲と活気が強化されたのだと思う。

また、地域の高齢者にとっても、老人ホームのお客様が大会に参加することに関して刺激を受けたようで、「100才になってもポッチャを楽しめるのなら、80台の私たちはまだまだ遊べる！希望が持てます！」と、練習試合を申し込んでくださり、交友関係が広がっています。ポッチャをきっかけに仲間がホームの外にできて、定期的に一緒に楽しむことが出来るようになってきたことは今回の取り組みでは収穫の一つです。

② 地域との関係性はポッチャだけではなく、

・包括支援センターとの連携により大田区西馬込地区のケアを担う人たちのピアカウンセリング“ケアラーの集い”を共同開催させていただき、その中で、有料老人ホームとはどんなところか？特養と何が違うのか？の勉強会、見学会を地域向けに開催させていただく機会をいただきました。約8名のケアラーさんが参加され、居家でケアをされているご家族様の貴重な話を聞かせていただきました。参加された皆様からは、有料老人ホームのラグジュアリーな空間でリラックスして話が出来て楽しかった。と感想いただきました。

・地域民生委員が主催する、おしゃべり会の会場として参加要請

・地域のお祭りへの参加のお誘いなど様々な依頼や相談を受けることが多くなってきました。

現在はロードマップの START から始め、目標 1 を達成しようとしています。今後とも目標2・目標3と一つずつ、達成して、いつの日か GOAL に設定した「地域と活発な交流があり、地域共生社会実現の拠点として貢献できるホーム」になれるよう、地域と連携して活動できる関係性を維持していこうと思います。

結果に基づく考察

地域はホームの資源を求めている。それは場所の提供だけでなく、専門職を有したチームとしての力を求めていると考えられる。場所だけであれば、公民館でもスーパーマーケットの催し物会場でも良いのです。

今回のポッチャ参加においても、実現させるには、ツクイ・サンシャイン西馬込のスタッフが様々な活躍をしています。

・看護と介護スタッフは大会までの間、お客様の状態を良い状態で参加できるよう日々支援している。

・機能訓練は他チームの選手との間を取り持ち、楽しくゲームが進行するようにコミュニケーションをサポートすることや転倒などの事故予防の為、フィジカル面で必要な支援を行いゲームが楽しめるようにサポートしている。

・相談員は大会当日のご家族観戦できるよう情報を発信するなど、外部とスケジュール調整、必要物品の手配等をおこない参加者全員で楽しめる環境を整えて当日を迎える。

・お客様の役割は地域の活動に元気に参加することで、自らのバイタリティーが向上するだけでなく、地域の皆様の希望の光になり、地域に活力をもたらす存在になれました。

一つの地域の活動に参加するために、スタッフとおお客様の力が、集結して達成できているのだと思う。

我々専門職の力を老人ホームという枠を超えて地域を含めた場所へ活動の場を広げることが出来たその先には専門職と一緒にツクイ・サンシャイン西馬込で暮らすお客様が活躍する地域ができれば面白いだろうと思う。

今後とも地域にとってもホームにとってもお客様にとっても三方よし Win-Win-Win で取り組んでいきたいと思ひます。

最期に・・・ **95歳のおばあちゃんがはしゃいでもいいんです！**

今後の課題

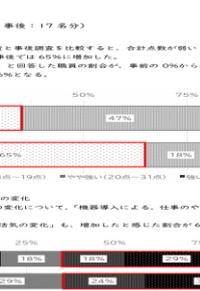
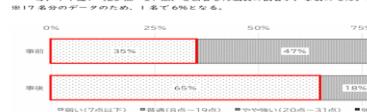
さらに地域の輪を広げて、目標2のテーマは地域の居場所。地域の若い世代学生と高齢者を繋げる架け橋になるにはどうしたらよいか。世代を超えた交流に挑戦していきたい。地域活動は公益性が高い団体であるため、広告や宣伝にはならないように配慮なくてはならない。

引用文献
参考文献

介護付きホーム研究サミット2024 第12回事例研究発表全国大会

優秀賞受賞者 研究発表概要

NO.10

法人名	株式会社さわやか倶楽部		
施設名	さわやか宗像館		
発表者名	篠原 陽子	役職	副施設長
研究タイトル	ICTで研ぎ澄ます感性 ～テクノロジーが介護現場にもたらすもの～		
ホーム所在地	〒811-4147 福岡県宗像市石丸1丁目13-2		
開設	2006年 3月 15日	定員	55名
平均介護度	1.85	職員比率	2.8 : 1
研究の目的	<p>① 介護 ICT 機器を導入（購入、デモ導入）することによる介護現場の変化、進化を観察。厚生労働省の実証事業において最も効果を示したテクノロジーとは</p> <p>② 更なる機器の導入デモンストレーション</p> <p>1. 泡洗浄による浴場清掃の負担変化考察（デモ導入）</p> <p>2. 業務可視化ツールを用いた排泄業務の減少</p> <p>3. 業務分析ツールの導入による、現場カンファレンスの変化について考察</p> <p>③ 介護現場業務の可視化、スケジューリングの効果考察</p> <p>④ その後の取組～地域への還元に向けて～アバターを活用した新サービス</p>		
研究の背景	<p>1・長く介護職員の不足に頭を悩ませていた宗像館は、それまで現場を支えていた現場介護主任の退職に伴い、指揮系統が乱れ属人的なケアからの脱却と、内容の刷新を急務としていた。そのような情勢のなか、同業他社様との分析ツールのデモ導入をきっかけに、厚生労働省における生産性向上の取組調査への参画が決定した。</p> <p>2・生産性向上の取組調査を終え、残存していた課題にテクノロジーを使ってアプローチ出来ないかと考え、定性的な負担の声が大きかった浴場清掃と、慣習化していた定時のトイレ誘導についてデータ分析を起点とした業務負担減少、効率化が図れないか検討する運びとなった。</p> <p>3・直接的、間接的業務の負担緩和と共に、職員の現場業務内で定性的な短い空き時間が目立つようになり、顕在していた介護職員同士の業務不平等感の解消の目的も合わさって、改めて業務の可視化と空き時間の集約化へ取り組むこととなった。</p>		
研究方法	<p>対象 さわやか宗像館</p> <p>期間 R5. 8月～現在</p> <p>①対象 ②期間 ③内容 ④方法</p> <p>内容 ICT 機器活用による現場オペレーションの効率化、業務可視化による生産性向上、ICT 活用と知見の利活用</p> <p>方法 ICT 機器の導入、導入後オペレーションの決定、業務可視化、アバター活用による介護相談システム</p>		
結果	<p>① 夜間直接業務の結果と思わぬ恩恵</p> <p>結果としては直接業務、間接業務の負担割合は大きく微減であった。しかし厚生労働省の調べによれば、職員のストレス指数となる心理的評価については大きな現象を認めた。またアンシェル導入後の夜間転倒割合は、それまでの運用と比較して平均で月1件減少した。</p>     <p>2. 職員調査（事前：17名分、事後：17名分）</p> <p>(1) 心理的負担評価（0点～10点） 心理的負担評価について事前調査と事後調査を比較すると、合計点数が低い（7点以下）と回答した職員の割合は、事前では35%から事後では6%に増加した。 一方、やや高い（6.0点～3.1点）と回答した職員の割合が、事前の49%から事後では66%になった。 ※17名分のデータのため、1名で6%となる。</p>  <p>(2) 機器導入によるモチベーションの変化 機器導入によるモチベーションの変化について、「機器導入による、仕事のやりがいの変化」は、増加したと感じる割合が66%だった。 一方、「機器導入による、職場の空気の変化」も、増加したと感じる割合が66%だった。</p> 		

② 浴場洗浄機器導入による負担変化の考察

擦る作業から、専用のフォームガンで吹きかけ泡吸着で待機して流すだけのオペレーションは、短縮した13分という時間以上に定性感覚での負担減少が高い結果となり、本格導入については9割の職員が賛同した。

それまで2名体制で行っていたことを1名で行えるようになったことも大きな収穫であった。

2・業務分析ツールによる負担変化の結果

スマートフォンデバイスを利用して介護記録をデータ化し、可視化。2時間ごとの定時のトイレ誘導の必要性を分析した結果、「空振り」と表現される実際には排泄がなかった時間帯が複数見つかった。同時期に導入した高機能おむつや尿取りパッドの効果もあり、スケジュール見直しにより3分の1、最大で半分に誘導数が減少し、その結果、特に夜間に不要なオムツ交換による睡眠妨害がなくなり、入居者様の負担も大幅に減少された。

③ 業務の可視化、スケジュール化による空き時間の創出

従来のスケジュールでは、職員が集団でタスクをこなしており、一体感や柔軟性があったが、全員が同じ目標やスキルを持つ必要があり、業務量や質に差が生まれ、不平等感が広がっていた。特にスキルの高い職員が、スキルの低い職員をカバーすることで、生産性が上がらない悪循環が発生していたことが大きな課題であった。

しかし新たな業務表を導入することにより、職員間のストレスレベルは大きく減少した。

※事前事後の職員のアンケート結果とライフマップを取る介護職員



業務スケジュール稼働後には、空き時間を利用して「ライフマップ」を取る職員が増加した。ライフマップとは当社においてケアプラン作成のためのアセスメントツールとしてケアマネジャーの中ではスタンダードなツールになっているが介護職員の中ではなじみが薄い

各専門職の知識・経験を地域へ還元する

さわやか倶楽部 3,037名 (2024.4時点)



企業のビジネススクアラーの介護離職予防として。あるいは百貨店・スーパー・ドラッグストア等の介護に悩む一般のお客様に対して、「いつでも気軽にポジティブに」をコンセプトにアバターを介した介護相談サービスをテスト導入中。

結果に基づく考察

①厚労省の調査においては調査方法の現場浸透が追い付かず、思う様な結果を示すことは出来なかったが、数ある機器の中で最も定量的効果を示したのは「アンシェル」であった。夜間の睡眠状況がモニターで確認出来るだけでなく体動状況や起床動作なども感知する、この機器は特に介護職員の夜勤業務に大きな恩恵をもたらした。

それまでの運用は1回当たり1分程度、実際に居室へ行って睡眠状況を確認する「直接巡視」を夜間2時間に1回行っていた。1回当たりの巡視が施設全体で1時間の負担(1分×60室)それを5回行つたため、トータルで5時間の業務負担がのしかけている訳である。しかしアンシェル導入後は、この状況が一変した。

アンシェルのモニター確認をそれまでの巡視と代替し、直視巡視を2回に縮小。モニター確認の回数は、あえて1Hに1回とし15分以上ベッドから離れている場合のみ訪室という運用に変更した。これにより、それまでの巡視負担から約3時間の業務負担減少を行うだけでなく、1分の手間で巡視回数を倍にした。

これにより直視巡視を減らしたにも関わらず、導入月以降は事故数が微減するという思わぬ恩恵も手にすることが出来た機器に加え、運用方法を適したものにすることにより相乗効果が図れることを認識した。

	<p>2-①導入した機器の内、清掃機器や、速乾ドライヤーなどの間接業務支援機器は、定量で重ねると、効果はわずかであり業務負担という点ではわかりにくい結果となった。（例：速乾ドライヤーであれば1名あたり40秒程度の短縮が見られたが人によって髪の長さも乾き方も異なることから意識していないと定量判断しにくい）</p> <p>しかし厚生労働省の生産性向上の取組調査によれば、機器導入以前と以後によって、職員の心理的負担が大きく改善しモチベーション向上に資するものとなったということが分かる。</p> <p>2-②従来の清掃工程では、すべてが手作業であり時間以上に身体的な疲労感があった。また着脱場、浴室場を二手に分かれて清掃することもあり、貴重な人員を割かざるを得ない状況であった。そこで既に厨房清掃機器としてポピュラーな存在になっていた、大手日用品メーカーとの協働検証を実施。これにより、時間削減以上に身体的な疲労感は大きく減少した</p> <p>今回の結果においては割愛しているが、時間効果とは別にメッツ（運動量）という指標に基づいて考察した場合、従来の清掃方法と新清掃方法では約60キロカロリー程度の差がある事が分かった。同数値は大人が8分間ランニングを行う程度の運動量である。今後、定量以上の定性効果を図るためには、この指標を用いる事の必要性も認識した。</p> <p>2-③新たな業務表を稼働することにより、これまでの集団タスク性から個別タスクへ切り替えたことで、スキルの低い職員は半強制的に時間に合わせ行動することによって、高い職員との足並みが少しずつ揃う様になった。また業務を可視化することにより、特定の業務がない「空き時間」が点在していることが分かり、それを集約化し日頃できないケアに充てる事で、入居者、職員双方の満足度が上がり、精神的な負担も減少した。空き時間は入居者様の QOL を向上する活動に充てられ、次第に「本当に入居者様が求めていることはなんだろう」と介護職員一人一人が考察するようになり、結果、当社のアセスメントツールであるライフマップを活用するようになった。これを更に展開すれば属人的ケアからの脱却と集団によるケアマネジメント展開の効果が期待できる。</p> <p>3アバターを活用したビジネスケアラーに対しての相談窓口事業は、ももとの介護のリソースに加え、テクノロジーに対して一定のリテラシーが求められる。しかし実証事業を通しテクノロジーに対しての抵抗感が薄れていたこともあり、前向きに取り組むことが出来ている。現在実証段階であるが、相談を受ける事で地域へのアウトリーチだけでなく職員自身の成長にも繋がっている。</p>
<p>今後の課題</p>	<p>① 【業務スケジュール稼働について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スケジュールリングする際に、スキルの高い職員に合わせて作成すると、ハードルが上がってしまうので、平均基準で作成した。それにより、フロア全体の生産性は上がるが、段階的に水準を上げて行かなければ、スキルの高い職員の生産性が下がる可能性がある ・一定の人員（配置基準以下）を下回ると、スケジュールリング自体が困難になり、元の運営に戻ってしまう。 <p>② 【アバター対応の、オペレータースキル】</p> <p>オペレーター自身のスキルは勿論、話し方や聞き方等、通常の相談とは異なる対話技術を習得する必要性あり</p> <p>③ 実証事業の調査内容について</p> <p>実証事業の効果測定指標となった「タイムスタディ」の運用方法が十分に伝わらず、職員のストレスや定性での業務負担は減少しているのに介助負担減少が、思ったより反映されない結果となった。改めて運用方法の統一と周知が重要となる。</p>
<p>引用文献 参考文献</p>	